

## チベット訳『梵天所問経』—和訳と訳注(5)

五島清隆

### 1 はじめに

本稿は、五島 [2009][2010][2011][2012] の続編であり、全6巻のうちの第5巻の和訳と訳注である。校合に用いた写本大蔵経 (B: パタン, K: 河口慧海将来本, L: ロンドン・シェルカル, Ph: プタク, T: トク・パレス) と版本大蔵経 (C: チョーネ, D: デルゲ, H: ラサ, N: ナルタン, P: 北京) の詳細に関しては、五島 [2002][2009] を参照願いたい<sup>(1)</sup>。

先の第4巻末尾 (XXII-1) では、それまでのテーマであった「法の話」「聖なる沈黙」の二事の教えが遠い過去において、普光如来によって説かれていたことが釈尊によって明らかにされるところで終わっていた。この第5巻は、その普光如来が他仏国土から来訪した二人の菩薩 (アクシャヤマティとヴィシェーシャマティ) に「浄明 (\*parisuddhābhāsa 清浄なる輝き) 三昧」を説くところから始まる (XXII-2)。この二人の菩薩は、今のマンジュシュリーとサマターヴィハーリンの前生であり、この二人に二事について質問するブラフマー神たる妙光が、今のヴィシェーシャチンティンの前生であるとされる。

内容的には、次の4点が注目される。

#### (1) 「浄明三昧」

特に注目すべきは、XXII-2に見られる次の表現である。「どのようなときも、清浄なものがないことではない。自性として清浄な (\*prakṛtipariśuddha) <清浄なるもの> は究極的に清浄 (\*atyantapariśuddha) なのである。それゆえ、一切の法は自性として明浄 (\*prakṛtiprabhāsvara) なのである」。これは『迦葉品』の「[真実の実践を行う沙門は] すべての存在がその自性において究極的に清浄 (prakṛti-atyantapariśuddha) であり、汚されていないことを見る」に近いが、

---

<sup>(1)</sup> このほか、本稿で用いる符号、記号、諸形式などについても前稿までのそれらに準じている ([2009] 142-143 頁参照)。なお、脚注番号が指示する箇所が比較的長い場合、その範囲を明確に示すために、例えば (1)..., ... (1) のように表記していたが、[2011] 以降では (1)→, ←(1) としている。この番号は、当該範囲の最後にくるべき番号で示される。

『梵天所問經』はこれを心の明浄性（心性本浄）を示す *praktiprabhāsvara* の用語に関連づけて説明しているのである。経はこの直後において〈一切法は自性として清浄であるがゆえに、心は自性として清浄なのである〉とし、さらに〈凡夫の心も自性として解脱しているというあり方で解脱している〉としている。ここには、阿含經以来の「客塵煩惱・心性本浄」の考え方と、『般若經』の空觀に基づく「諸法清浄」の考え方、更に後の如来藏思想につながる要素も見られる。「心性本浄」が説かれるのは本經においてはここだけなので、この点は本經の成立（あるいは編集）の思想史的背景を考える上で重要である。本經では『般若經』が頻用する「法性（法則性 *dharmatā*, *dharmānam dharmatā*）」と『十地經』が重視する「法界（*dharmadhātu*）」が併用され、全体的には後者がより根源的なものとされるが、これらの点を含めて、初期大乘仏教思想史の觀点を踏まえた包括的な考察が必要であろう。

## (2) 「ことば (*vacana*, *adhivacana*) と「表示 (*prabhāvanā*)」

本經は、世間的なものと出世間的なものは不二の關係にあり本来清浄であることを説くが、単にそういう真実を明らかにするだけではなく、真実を明示する手段となる「ことば」「説法」、更にその根底にはたらく説者（仏陀・菩薩）の慈悲や方便についての考察も重視されている。XXV では、この「ことば」について通俗語源解釈を用いて次の様に説明する。〈そもそも「ことば（\**adhivacana* 指示することば）」とは、他人を理解させるものであり、前分に *adhi* とあるのは、何らかの目標の設定（\**adhikāra*）によって〔真実には存在していないものを存在するものとして〕提示（\**samāropa* 増益）するからである。同じことばであっても、如来が何かを提示することなく、目標も設定しないで説く場合は「すぐれた（\**adhi-ka*）ことば（\**vacana*）」とされる。また、一切のことば（\**vacana*,  $\sqrt{vac}$  の名詞形）はことばではないので、仏陀によって説かれる（\**ukta*,  $\sqrt{vac}$  の過去分詞）ことはない。また、仏陀は「説く」ということによって〔仏陀であると〕表示される（\**prabhāvita*）こともない。仏陀はどのようなもの・しるし・概念によっても表示されないが、そのように、いかなるものによっても表示されないものとして表示される〉とする。

更に、XXVII-2, 3 では、〈一切諸法は名称の本質（\**nāma-svabhāva*）という点で遠離しており、変異しないものであるが、そういうものとして諸法を表示するから、如来は真実を語る〉とする一方で、〈如来はいかなる法も対象化しないのであるから、まして、なにかを表示したりすることはない〉ともしている。

本經はそもそも、真実をめぐる問いとそれへの応答という形式をとっており、とりわけ、説法や問答と真実との關係を自らに問う意識が強い。第4巻で見られる「デーヴァダッタのことば=如来のことば」も、「法の話・聖なる沈黙」への関心の強さも同じ問題意識がもたれていると考えられる。

## (3) 大乘の菩薩行

XXVI は、「大乘に向かつて出発した（\**mahāyānasamprasthita*）」菩薩（巧みな人）に関する80の詩頌からなる釈尊のことばである。内容は「菩薩の不二の菩提行」「六波羅蜜」「大乘の稱讚」「經典の功德」であるが、前半の2項目は今まで述べられてきたことの要約・確認に近い。

注目すべきは、主に、不二と縁起の観点から述べていながら、「空」の語にはほとんど関説しない点であろう。なかでも第 63 偈は、「縁〔というもの〕を信解すれば、邪見は存在しない。このように、一切諸法は、縁に依拠しているので、自性はない」としており、この偈は『般若灯論』に引用されている。後半の 2 項目は他の大乘經典に共通に見られる内容であるが、敢えて注目すべき偈を挙げるとすれば、「この經典を護持する人たちは、無量の劫の間、輪廻して、完全な悟り (\*saṃbodhi) に近づく。彼らは偉大性 (\*mahātmya) を捨てる」とする第 77 偈であろうか。下線部の「偉大性」が「仏陀の偉大性」(buddhamāhātmya) を指しているとするれば、この表現は仏陀になることを断念して輪廻の中で衆生救済に励む「菩薩の意図的な輪廻」を意味しているのかも知れない。ただし、3 漢訳にはこれに相当する訳文は見当たらない。

#### (4) 「法の実践 (dharmapratipatti) と「師子吼 (siṃhanāda)」

XXX-1 において、集會にいた不退転天子の「法の実践」に関する問いに対して世尊は、不二の観点から、不実践こそが実践にほかならないことを答える。これを受けてシャクラ (帝釈天) が、「正しき人 (\*satpuruṣa) による「楽説 (\*pratibhāna ひらめきに基づく説法)」を「師子吼」に他ならないとして称讃し、不退転天子にその「師子吼」に関して「楽説」することを求める。不退転天子は、大乘の教えを言葉にして断言的に説くこと、六波羅蜜を實踐することが師子吼であると説く。

この師子吼に関する楽説が示されたとき、<いまここで第二の転法輪が生じた>との讃嘆の声があがり、世尊の微笑と放光が示されて、不退転天子に対する成仏の予言が期待されるところで第 5 卷は閉じられる。

## 2 和訳と訳注

### 第五卷 (bam po lnga pa)

#### (XXII-2) (2)

「良家の子よ、その時、上方の藥王 (\*Bhaiṣajyarāja) (3) 如来の仏国土から、アクシャヤマティ (\*Akṣayamati 尽きることのない知恵をもつ者) (4) とヴィシェーシャマティ (\*Viśeṣamati すぐれた知恵のある者) (5) の二人の菩薩がやって来た。〔やって来てのち〕その二人は、〔喜見という世界の〕 (6) 普光 (\*Samantaprabha) 如来・世尊のところに行き、世尊の足に頭をつけて礼拝してのち、三回右繞して一面に坐した。

(2) 前の第 4 卷末尾の世尊 (釈尊) の説法 (XXII-1) の続きである。

(3) Tib:sman pa'i rgyal po. Ch1, 2:醫王. Ch3:藥王. 過去仏の名としては LV (ch.13, v.62) や VKN (ch12, secs.7-15) に見られる。

(4) Tib:blo gros mi zad pa. Ch1:欲盡. Ch2, 3:無盡意. 『無尽意菩薩經 (Akṣayamatīnirdesaśāstra)』『法華經』「觀世音菩薩普門品」の主要対告者。

(5) Tib:khyad par blo gros. Ch1:持意 (→ 特意=元, 明, 異). Ch2, 3:益意. 本經第 1 章冒頭の十六正士の一人としてその名が見られる。

(6) Ch3 のみ。

その二人に対してかの如来は『浄明 (\*pariśuddhābhāsa 清浄なる輝き)』<sup>(7)</sup> という三昧を詳しく正しく教示した。なぜ、『浄明』というのかというと、かの三昧を得た菩薩は、すべての相 (\*lakṣaṇa) と煩惱から解脱し、諸仏の一切の法において輝きを得るからである。それゆえ、『浄明』というのである。

<sup>(10)</sup>→ 一切の法は前際 (\*pūrvānta 過去) において [P78a] 清らか (\*pariśuddha) である。一切の法は後際 (\*aparānta 未来) において清らかである。一切の法は現在際<sup>(8)</sup> において清らかである。<sup>(9)</sup>→ これは三世において清らかである、といわれる。<sup>(9)</sup>←<sup>(10)</sup> どのようなときも、清浄なものが不浄になることはない。<sup>(11)</sup>→ 自性として清浄な (\*prakṛtipariśuddha) <清浄なるもの>は究極的に清浄 (\*atyantapariśuddha) なのである。<sup>(11)</sup>←<sup>(11)</sup> それゆえ、一切の法は自性として明浄 (\*prakṛtiprabhāsvara)<sup>(12)</sup> なのである、と言われる。かの諸法の自性 (\*prakṛti) とは何か、というと、一切の法は空性という自性を有し、対象化を離れている。一切の法は無相という自性を有し、思惟や分別を離れている。一切の法は無願という自性を有し、取り入れることがなく、捨て去ることがなく、<sup>(13)</sup>→ 志願がなく、能力がなく←<sup>(13)</sup>、完全に本質 (\*svabhāva)<sup>(14)</sup> から離れている。それは、自性として清浄なのである。輪廻の自性は涅槃の自性である。涅槃の自性は一切諸法の自性である。それゆえ、心は自性として清浄であるといわれる。

良家の子よ、たとえば、虚空 (\*ākāśa) はがらんとしていて (\*ābhyavakāśika<sup>(15)</sup>) [何かに] 汚されるということはあるえない (\*asthāna) し、その余地もない (\*anavakāśa)。良家の子よ、ちょうどそのように、心の自性もまた、[煩惱に] 汚されるということはあるえないし、その余

<sup>(7)</sup> Tib:snang ba yongs su dag pa. Ch1:清浄. Ch2, 3:浄明. 「浄明三昧」と「自性清浄心」との関係については平川 [1968] の「大乘經典における心性本浄説」(211-217 頁, 特に 216 頁) の項参照。

<sup>(8)</sup> Tib:da ltar byung ba'i mtha'. Ch1, 2, 3:現在. Tib に見られる「現在際」という表現は極めて稀な用例である。『智光明莊嚴經』では、pūrvāntato 'jātā, aparāntato 'saṃkrāntā, madhye viviktā. (Tib: sngon gyi mthar ma skeyes pa dang, phyi ma'i mthar mi 'pho ba dang, dbus su dben pa yin no.) とある所を曇摩流支訳は「如彼方本際不生, 未來際不去, 現在際不住」としている (JĀA sec.32)。惟浄等訳では最後を「中際性離」としている。こども原文では madhya (中) となっていた可能性がある。現在に anta (辺) や koṭi (際) という表現はそぐわないからである。

<sup>(9)</sup> Ch1:此名二清浄. Ch2:是三世畢竟浄. Ch3:是三世法畢竟清浄.

<sup>(10)</sup> 「三世清浄」については、注 113 参照。

<sup>(11)</sup> Tib:yongs su dag pa gang gi(KL:gis) rang bzhin gyis yongs su dag pa 'di(BNPPH:de) ni shin tu yons su dag pa ste. Cf. KP sec.125:「[真実の實踐を行う沙門 (bhūtapratipattiḥ śramaṇaḥ) は] すべての存在がその自性において究極的に清浄であり、汚されていないことを見る」atyantapariśuddhaś ca prakṛtyā sarvadharmā asaṃkṣiṭān paśyati (Tib:chos thams cad shin tu yongs su dag cing rang bzhin gyis kun nas nyon mongs pa med par mthong).

<sup>(12)</sup> Tib:rang bzhin gyis 'od gsal ba. Ch1:本清浄. Ch 2:性常清浄. Ch3:自性清浄常清浄. なお、prabhāsvara (Pā. pabhassara) は、「心の輝き、無垢の純粹さ」を現す語として用いられるが、本来は「透き通ったような輝き、美しさ」の意。例えば、KP sec.85, v.1:「光り輝く瑠璃の宝珠」 vaidūryamaṇi prabhāsvaraḥ.

<sup>(13)</sup> Tib:bsam pa (\*āśaya) med pa, nus pa (\*śakti) med pa. Ch1:爲無所願堪任究竟. Ch 2:無求無願. Ch3:無求無欲.

<sup>(14)</sup> Tib:ngo bo nyid. Ch1:自然. Ch 2, 3:自性. 本訳では ngo bo nyid (\*svabhāva) を「本質」、rang bzhin (\*prakṛti) を「自性」と訳し分ける。

<sup>(15)</sup> Tib:bla gab med pa. Cf. Mvy 1136.

地もない。良家の子よ、たとえば、虚空に<sup>(16)</sup>→雲のかたまり、煙、塵が生じて←<sup>(16)</sup>、それによって虚空が<sup>(17)</sup>→美麗でなく、輝いていない←<sup>(17)</sup>としても、それらが虚空の自性を汚すことはない。もし、虚空が汚されるとするならば、真に清浄(\*viśuddha)になることは〔決して〕ないであろう。このように、〔決して〕汚されることがないから、それゆえ、『虚空』という風に [P78b] 表示される(\*prabhāvita)<sup>(18)</sup>のである。良家の子よ、ちょうどそのように、愚かな凡夫は理にかなわない精神集中(\*ayoniśomanasikāra)を有して、煩惱を起こすが、彼らの心の自性が汚されることがない。もし、汚されるとすれば、完全に清浄になることはない。このように、汚されることがないから、それゆえ、〈自性として解脱している〉というあり方で、〔彼らの心は〕解脱しているのである。

良家の子よ、これが「浄明」という三昧に入ることだ、と以上のように、かの如来は、その二人の菩薩に対して、説いたのである。その二人はこの三昧を聞いて、不可思議な法に対する法の輝きを得た<sup>(19)</sup>のである。

### (XXIII-1)

その時、アクシャヤマティ菩薩は、世尊である普光如来に対して次のように申し上げた。『世尊よ、我々二人は、この三昧に入ることを聞いたのですが、世尊よ、我々は、どのような住し方で住すべきでしょうか』

そう言われて、かの世尊は、彼ら二人の良家の子らにこう仰せになられた。『良家の子よ、ここにおいて、汝は、法の話の正しく語りなさい。また、聖なる沈黙に住しなさい』

その時、その二人の菩薩は、<sup>(20)</sup>→世尊から『そのようにしなさい(\*sādhu)』と〔いうことばを〕聞いて←<sup>(20)</sup>、世尊の足に頭をつけて礼拝して、三回右繞してのち、世尊のもとから、園林(\*udyāna)のあるところに行った。そこに行って、みずからが化作した楼阁の中に住した。

### (XXIII-2)

その二人がそこに住しているときに、妙光<sup>(21)</sup>という大ブラフマー神と七百二十万<sup>(22)</sup>の

<sup>(16)</sup> Tib:sprin gyi phung po'am, du ma'am, rdul dag byung ste. Ch1:雲霧烟塵. Ch 2, 3:爲烟塵雲霧覆翳.

<sup>(17)</sup> Tib:mi mdzes shing lham me lhang nger mi 'gyur. Ch2, 3:不明不浄. 句の後半は仏を形容する定型句に見られる表現: lham me, lhan ne, lhang nge (Skt. bhāsate tapati virocate, Pā. bhāsati tapati virocati). Cf. *Mvy* 6289-6291, *Sukh* 55.26.

<sup>(18)</sup> Tib:rab tu dbye. rab tu 'byed の未来形. 過去形は rab tu phye. 想定される原語 prabhāvayati には、AD によれば、to increase, to provide more fully, to recognize, to gain power or strength, to make powerful などの意味がある。ここでは to recognize の意にとつて、rab tu phye, rab tu dbye (\*prabhāvita) を「〔それと〕認知される」「〔それと〕顕示される」と解した。ただし、文脈上、ことばとの関係が濃厚なので、以下一貫して、「表示される」と訳出する。rab tu phye (prabhāvita) の語義については、高崎 [1974]468 頁参照。

<sup>(19)</sup> Tib:chos kyi snang ba thob bo (\*dharmālokaprāpta). Cf. *SR* 219.3.

<sup>(20)</sup> Tib:bcom ldan 'das las ... legs so zhes bya ba thos te. Ch1:因從世尊聞. Ch2,3:從佛受教.

<sup>(21)</sup> Tib:'od zer bzang po. Ch1:善光. Ch2, 3:妙光. 藏訳、漢訳から、Bhadraprabha, Suprabha, Suraśmi などが想定される。なお、『法華経』羅什訳に見られる「妙光(菩薩)」の原語は Varaprabha (Tib:'od mchog) であるが、『法華経』においても vara を bzang, bzang po とする訳例は少なくないので、この Varaprabha も想定原語の候補になるであろう。Varaprabha はマンジュシュリー法王子の前身、日月燈明如来の実子であり、『法華経』の保持者・説法師である。

<sup>(22)</sup> Ch1, 2, 3:七萬二千.

ブラフマー神とが、かの二人のところにやって来た。やって来ると、その二人の菩薩の足に [P79a] 頭をつけて礼拝し、三回右繞してから、かの二菩薩にこう言った。

『良家の子よ、かの普光如来・世尊は、「集まって坐っている者には、すべきことが二つある。法の話をしなければならないことと、聖なる沈黙に住しなければならないことである」とこのように仰せになられたが、そのうち、法の話とは何ですか。聖なる沈黙とは何ですか』

そう言われて、かの二菩薩は、ブラフマー神である妙光にこう言った。『ブラフマー神よ、<sup>(23)→</sup> それでは、質問に対する答えを少しばかり語りますから、聞いてください ←<sup>(23)</sup>。 <sup>(24)→</sup> この点に関しては、如来〔のみ〕が、直証なされ、彼岸の高みに到達なされています ←<sup>(24)</sup>』

良家の子よ、そのように、かの二菩薩は、集会の中において、法の話と、聖なる沈黙とに関して、<sup>(25)→</sup> この二つの意味〔深い〕ことば (\*arthapada) ←<sup>(25)</sup> を詳細に (\*vistareṇa) 教示した。そのとき、七百二十万のブラフマー神たちは、無生法忍を生じた。ブラフマー神である妙光は「普明 (\*samantāloka 周囲いっぱい)の光明) 三昧<sup>(26)</sup>」を目の当たりにし、〔それを〕獲得した。

良家の子よ、そのように、途絶えることのない、ひらめきに基づく説法 (\*pratibhāna 樂説) を持つ二人の菩薩は、問われた二つのこと、つまり、法の話と聖なる沈黙とを教示 (\*saṃprakāśa) し続けた。かの二人は、七万六千年の間、〔怠ることなく休むことなく〕<sup>(27)</sup> <sup>(28)→</sup> この二つの意味〔深い〕ことばをはっきりさせながら、〔互いに〕問いに答えた。 ←<sup>(28)</sup> <sup>(29)→</sup> 〔しかし、二つのことばの〕一つの究極に行くことはなく、〔ましてや〕両方の究極に行くことはなかった。 ←<sup>(29)</sup>

そのとき、かの〔普光〕如来は、上方の虚空にあって、かの二人にこのように仰せになられた。

『良家の子よ、やめなさい (\*alam)。演説によって論争してはならない。演説によって論争を生じてはならない。一切の論争はこだま (\*pratiśrutkā) と同じであって、<sup>(30)→</sup> 〔最初に発せられた〕声 (\*śabda) の通りにその反響 (\*pratiśabda) があるのである。 ←<sup>(30)</sup> [P79b] <sup>(31)→</sup> 汝〔ら〕のひらめきに基づく説法 (\*pratibhāna) は、尽きることのない完成 (\*abhinirhṛta) された特別な表現能力 (\*pratisaṃvid 無礙解) に到達している (\*adhigata)。 ←<sup>(31)</sup> 〔しかし〕汝〔ら〕が〔自ら〕望んで、この問われた意味を、一劫あるいは一劫以上に渡って問いに答えた

(23) Ch1:且聽粗答所問。Ch2:汝今善聽。我當少說。Ch3:汝今至心善聽。我當少分爲汝說之。

(24) Tib:di la de bzhin gshegs pa ni mngon sum ste pha rol gyi mchog brnyes so. Ch1:如来目觀(觀) 分別說耳。度於無極。Ch 2, 3:唯有如来乃通達耳。

(25) Tib:don gyi tshig'di gnyis. Ch1:以此二句。Ch2, 3:以此二句義。

(26) Tib:ting nge 'dzin kun tu snang ba. Ch1:普明三昧。Ch2:普光明三昧。Ch3:普光三昧。Cf. Mvy 562: samantāloko nāma samādhiḥ, kun tu snang ba shes bya ba'i ting nge 'dzin.

(27) 2 漢訳のみ。Ch2, 3:不懈不息。

(28) Tib:don gyi tshig 'di gnyis gtan la 'bebs shing lan ldon par gyur te. Ch1:宣布二句而發遣之。Ch2, 3:分別二句, 互相問答。Cf. TED p.205r. gtan la 'bebs pa: to put in order, to arrange, to reduce to a system. Mvy 6591 lan ldon:visarjana.

(29) Tib:gcig gi yang mthar ma phyin. gnyis po'i yang mthar ma phyin to. Ch1:不得一句之崖, 況復二句。Ch2, 3: (互相問答而) 不窮盡。

(30) Tib:sgra ci 'dra ba de bzhin du sgra brnyan yang de bzhin no. Ch1:如呼聲響所因得脫便而順從因響便 (→ 亦) 入。Ch2, 3:如所問答亦復如是。

(31) Tib:khyed(CDHNP:khyod) kyi spobs pa so so(BPh:sor, CDHN:so'i) yang dag par rig pa mi zad pa mngon par bsgrubs(DPPH:sgrub) pa khong du chud do. Ch1:其辯才者有所分別。無盡之行不可究竟。Ch2, 3:汝等二人皆得無礙辯才及無盡陀羅尼。

としても、汝〔ら〕のひらめきに基づく説法が究極に到るということはない。それに対して、<sup>(32)</sup>→ 仏陀のことばは、極めて平静である (\*upaśānta)。寂静であり (\*praśānta)、静まっており (\*śānta)、文字 (\*akṣara) のない意味 (\*artha) なのである。意味は語られるものではない。語る限り意味はない。←<sup>(32)</sup> <sup>(33)</sup>→ 意味に依りなさい、ことばに依ってはならない ←<sup>(33)</sup>』というふうに、かの二人は世尊に訓誡された (\*codita) ことを知って、黙してしまった。良家の子よ、こういう道理によって (\*anena paryāyena)、菩薩たちは、このように、〔自ら〕望んで、百・千劫あるいはそれ以上にわたって、ひらめきに基づく説法によって説いたのだと理解すべきである。良家の子よ、その時、その時点で、二人の菩薩を他の者であると考えようなことはしてはいけない。なぜならば、このマンジュシュリー法王子が、そのときアクシャヤマティ菩薩であったのであり、サマターヴィハーリンよ、汝もまた、そのとき、その時点で、ヴィシェーシャマティ菩薩であったからである。〔また〕そのとき、その時点で、偉大なブラフマー神であるヴィシェーシャチンティンは、ブラフマー神である妙光であったのだ

## (XXIV-1)

そのとき、偉大なサーラ樹のごときバラモンの子であるサマターヴィハーリンは、世尊にこう申し上げた。

「世尊よ、〔素晴らしいことです。〕<sup>(34)</sup> かの懸命な努力 (\*abhiyoga) をするという精進 (\*vīrya) を実践する人々にとって、如来がたの悟りは大いに意味のあることでしょう。〔一方、そのような〕懸命な努力をしない人々に対しては、百・千の仏といえども、一体なことができるでしょうか。世尊よ、懸命な努力こそ悟りなのです」

## (XXIV-2)

その時、マンジュシュリー法王子 (M) は、偉大なサーラ樹のごときバラモンの子であるサマターヴィハーリン (S) にこう言った。『<sup>(35)</sup>→ どのようにしたら、[P80a] 菩薩は<懸命に努力している、懸命に努力している>といわれるのでしょうか ←<sup>(35)</sup>』

〔Sが〕言う。「菩薩が、どのようにであれ、努力 (\*yoga) をすることで、現観 (\*abhi-samaya 明瞭に真理を観ずること) <sup>(36)</sup> を得るのであれば、これが、懸命な努力 (\*abhi-yoga) なのです」

<sup>(38)</sup>→ 〔Mが〕言う。「どのようにしたら、懸命な努力によって現観を得るのでしょうか」

〔Sが〕言う。「いかなる法をも分別することがない人が、そのように懸命に努力することで、現観を得るでしょう」

<sup>(32)</sup> Ch1: 佛言寂然澹泊無有文字誼宜之事。又不以利養如供養利。Ch2:佛法是寂滅相第一之義。此中無有文字不可得説。諸所言説皆無義利。Ch3:諸佛之法是寂滅相第一之義。此中寂靜畢竟寂靜。無字無義不可言説。所有言説皆是無義。Cf. *JĀA* sec.35:yac chāntam(Tib:zhi ba) [tat] praśāntam(Tib:rab tu zhi ba) / ya(ud)t praśāntam tad upaśāntam(Tib:nye bar zhi ba) / yad upaśāntam sa upaśama(m)[h] (Tib:nye bar zhi bar gyur pa) / yaś copaśamaḥ sa munir(Tib:thub pa) ity ucyate /

<sup>(33)</sup> Cf. *VKN* XII-12:arthapraṭiśaraṇatā na vyañjanapraṭiśaraṇatā(Tib:don la rton gyi tshig 'bru la mi rton pa); *GUP* (H ed. Ca) 279a4 :don la rton gyi, yi ge la mi rton pa.

<sup>(34)</sup> 3 漢訳のみ。Ch1:至未曾有。Ch2:未曾有也。Ch3:希有。

<sup>(35)</sup> Tib:ji ltar na byang chub sems dpa' mngon par brtson pa mngon par brtson pa zhes bya ba. Ch1:仁, 族姓子, 豈能別知何所遵修名於菩薩為精勤乎。Ch2, 3:善男子, 汝知菩薩云何行名勤精進。

<sup>(36)</sup> Tib:mngon par rtogs pa. Ch1:有時節無所思念。Ch2, 3:聖道。

〔Mが〕言う。「どのような場合に、現観は現観なのでしょうか」

〔Sが〕言う。「平等性 (\*sama-tā) によって一切の法を平等なものとして見る場合に、現観 (\*abhi-samaya) は現観なのです」

〔Mが〕言う。「良家の子よ、平等性を見ることなどできますでしょうか」

〔Sが〕言う。「できません」

(37)→〔Mが〕言う。「もしできないのであれば、平等ではありません。平等などありえないのです」←(37)←(38)

### (XXV)

ヴィシェーシャチンティン (V) が言う。(39)「マンジュシュリーよ、平等性によって一切の法を見ないことが、現観であると言われるのです」

マンジュシュリーが言う。「ブラフマー神よ、なぜ見ないのですか」

〔Vが〕言う。「二〔想〕を離れているから見ないのです。マンジュシュリーよ、不見が正見なのです」

〔Mが〕言う。「(40)→ブラフマー神よ、誰が世間の平等性を見るのですか←(40)」

(41)→〔Vが〕言う。「如来が見ます」

〔Mが〕言う。「どのように見るのですか」←(41)

〔Vが〕言う。「色の真如 (\*tathatā) と別ものとはせず、受・想・行・識の真如とも別ものとはしないように〔見るの〕です。マンジュシュリーよ、五蘊の真如の通りに見ることが世間を正しく見ることなのです」

〔Mが〕言う。「ブラフマー神よ、世間は何によって表示される (\*prabhāvita) ののですか」

〔Vが〕言う。「尽相 (\*kṣayalakṣaṇa 滅尽するという特質) によって表示されます」

〔Mが〕言う。「もし世間が尽相によって表示されるのであれば、ブラフマー神よ、その世間の相は尽きてしまうのでしょうか」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、世間の相 (\*lokalakṣaṇa) が [P80b] 尽きることはありません」

(37) 3漢訳(及び『大乘掌珍論』の引用部分)は、この部分も答者(サマターヴィハーリン)の発言としている。ただし、3漢訳では<平等を見ればそれは平等ではなく、平等を見なければそれは平等である>という趣旨。Ch1:設見平等者則便墮於六十二見,不爲平等。Ch2:所以者何。若平等可見則非平等。Ch3:何以故。文殊師利,若平等法可得見者則非平等。文殊師利,若能不見諸法平等,是則名爲見於平等。

(38) [引用]『大乘掌珍論』

〔Ch〕:又如問言。云何精勤應修現觀。答言。若知無有少法思惟分別,如是精勤應修現觀。復問。云何已證現觀。答言。若能觀一切法皆平等性。復問。有能見一切法平等性耶。答言。無能見平等性。若有所見是則應成不平等見。(Taisho vol.30 277a12-17)

(39) Ch3のみ次の部分を含む。Ch3:善男子,諸法平等可得見不。答言。梵天,不可見也。若見平等非平等見。梵天言。

(40) Ch1:豈在梵宮爲等見乎。

(41) Ch1:報曰。何等爲見。Ch2:答言。不壞世間相者。又問。云何爲不壞世間相。なお、この部分と次のヴィシェーシャチンティンのことばにおいて、藏訳は、主語を如来として敬語(gzigs:ご覧になる、mdzad:なさる)を用いて表現している。

〔Mが〕言う。「では、どうして世間は尽の相によって表示されるのでしょうか」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、完全に尽きたものは、尽きることはありません。なぜなら、尽きてしまったものは〔もうそれ以上〕尽きることはないからです」

〔Mが〕言う。「ブラフマー神よ、如来は、<sup>(42)</sup>『有為(\*saṃskṛta)は尽の性質(\*kṣayadharma)をもつ』<sup>←(42)</sup>と仰らなかつたのでしょうか」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、およそ<sup>(43)</sup>尽の法則性(\*dharmatā)<sup>←(43)</sup>は、決して尽きることはありません。それゆえ、如来は『有為は尽の性質をもつ』と仰ったのです」

〔Mが〕言う。「ブラフマー神よ、何によって有為と名づけられるのですか」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、尽の法則性ゆえに有為と名づけられます」

〔Mが〕言う。「ブラフマー神よ、有為は何に住していますか」

〔Vが〕言う。「無為(\*asaṃskṛta)の自性(\*prakṛti)に住しています」

〔Mが〕言う。<sup>(44)</sup>「ブラフマー神よ、有為と無為の諸法にどんな区別がありますか」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、有為と無為の諸法を区別するのは言説(\*vyavahāra)です。<sup>←(44)</sup>なぜかと言えば、言説によって、『これは有為である』、『これは無為である』と教示するからです。有為の法則性(\*dharmatā)は無為の法則性なのです。法則性に区別はありません」

〔Mが〕言う。<sup>(45)</sup>「この法則性というのは、何を指示することば(\*adhivacana)ですか<sup>←(45)</sup>」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、法則性というのは、無為とは無差別な諸法を指示することばです」

〔Mが〕言う。「<〔指示する〕ことば(\*adhivacana)>の意味は何ですか」

〔Vが〕言う。<sup>(46)</sup>「他人を理解させるために説く場合に、それゆえに、これを<指示することば(\*adhivacana)>とといいます。<sup>←(46)</sup>なぜなら、すべての<指示することば(\*adhi-vacana)>

(42) Tib: 'dus byas zad pa'i chos can no. Ch1: 其盡法者謂有爲事。Ch2: 一切有爲法是盡相。Ch3: 諸有爲法是盡相。Cf. SN III 24.23-25 「アーナンダよ、色は無常であり、有為であり (saṅkhatam), 縁已生であり、尽の性質をもち (khayadhammam) ……滅の性質をもつ」

(43) Tib: zad pa'i chos nyid. Ch1: 其盡法者。Ch2: 盡相。Ch3: 盡法相者。

(44) [引用]『般若灯論』(Prajñāpradīpa)

〔Ch〕: \*\*\*\*\*

〔Tib〕: de bzhin du (AVP: 'phags pa tshangs pa khyad par sems kyiis zhus pa'i mdo las /) tshangs pa 'dus byas dang / 'dus ma byas kyi chos rnam la tha dad du bya ba ci yod [ / ] smras pa / 'jam dpal 'dus byas dang / 'dus ma byas kyi chos rnam la tha snyad tsam<sup>1</sup> tha dad par bya ba yin te / <sup>(3)</sup>→ byang chub sems dpa' gzungs<sup>2</sup> 'di 'dzin pa ni 'dus byas dang / 'dus ma byas kyi chos rnam la rlom sems su mi byed / dmigs par mi byed do // <sup>←3</sup>zhes byas ba la sogs pa ... (Pra Peking ed. dBu-ma Tsha 139b2-4 ; AVP Peking ed. dBu-ma Sha 175b8-176a2) 1) AVP : adds du. 2) AVP :gzugs. 3) この部分は BP には存在しない。

(45) Ch1: 所言法者爲何謂耶。Ch2: 何等是諸法實相義。Ch3: 何等法上有此言語。

(46) Ch1: 有所囑累有所講說。是謂言説。Ch2: 以文字説令人得解故名爲義。Ch3: 所謂爲他令心取相説彼言語。なお、以下の所論は、adhi-vacana の語義を通俗語源解釈によって説明したものであるが、3 漢訳はそれを反映させられないので、内容の説明に限定されている。Cf. Ssp 348.5-7: 「<〔教団に〕発生した紛争 (adhikaraṇa) >というのは、<勝れたもの (adhika) として〔自らを現実以上に高く〕提示することば>を指示することばなのです。大徳シャーラッドヴァティーブトラよ、

は、目標の設定 (\**adhi-kāra*)<sup>(47)</sup> によって〔真実には存在していないものを存在するものとして〕提示 (\**samāropa* 増益) するからです。それゆえ、如来が提示することなく、目標も設定しないで説く場合には、それが、すぐれた (\**adhi-ka*) ことば (\**vacana*) と言われるのです。また、マンジュシュリーよ、一切のことば (\**vacana*) は、ことばではないので、[P81a] それゆえ、仏陀のことばは、説かれる (\**ukta*) ことがない、といわれます。なぜなら、<sup>(48)</sup>→ 正しく悟った仏陀の場合、説くということによって〔仏陀だと〕表示される (\**prabhāvita*) ことはないからです<sup>←(48)</sup>」

〔Mが〕言う。「正しく悟った仏陀はどのようなものとして表示されるのですか」

〔Vが〕言う。「色〔身〕(\**rūpa* 物質的な身体)としても、〔三十二〕相 (\**lakṣaṇa* 外見的な特徴)としても、〔十八不共仏〕法 (\**dharma* 仏陀のみが有する徳性)としても、〔およそ〕表示されることはありません」

〔Mが〕言う。「<sup>(49)</sup>→〔では〕色・相・法 (\**rūpalakṣaṇadharmā*) とは別のものとして表示されるのですか<sup>←(49)</sup>」

〔Vが〕言う。「そんなことはありません。なぜなら<sup>(50)</sup>、色・相・法の真如 (\**tathatā*) はそれとは〔別〕ではありませんし、それ以外のものとも〔別〕ではありません。そのように、如来たちは表示します。このように、真如によって明らかに説き示され (\**prakāśita*) つつも、〔真如を〕失う (\**vipranāśita*) ことはない、とそのように表示されるのです」

〔Mが〕言う。「もしそうであるなら、如来はいったい何を覚られた (\**abhisambuddha*) ののですか」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、そのように、如来は、<sup>(51)</sup>→一切諸法の自性 (\**prakṛti*) と本質 (\**svabhāva*) のあるがままに、その通りに、悟られ (\**abhisambuddha*)、現観 (\**abhisamaya*)

---

<〔真実を無視した〕勝れたものの提示>を実行している者は、世間において、供養されるにふさわしいものです。なぜなら、かの<勝れたものの提示 (*adhikasamāropa*)>は、〔真実の観点からは〕平等 (*sama*) だからです」*utpannam adhikaraṇam iti adhikasamāropasyaitad adhivacanam |adhikasamārope bhadanta śāradvatīputra caran loke dakṣiṇīyo bhavati |tat kasmād dhetoḥ? tathā hi samaḥ so 'dhikasamāropaḥ |*

(47) *adhikāra*(Tib: *lhag par byed*) の語義については、五島 [2009]165 頁 (*BP* III-2, 注 121) 参照。 Cf. *Su* 21.20-22: 「<高慢 (*adhi-māna*)>というのは、長老アーナンダよ、<〔自分は勝れているのだ (*adhi-ka*) という〕目標の設定 (*adhi-kāra*) によって〔真実にはそうでないことを、そうだと〕提示すること (*samāropa*)>を指示することば (*adhi-vacana*) なのです。高慢心において行動するものは、〔余計な〕目標設定の提示において行動しているのです。かれらは平等な (*sama*) 行動をする者 (*cārin*) ではありません」*adhimāna ity āyuṣmann ānandādhikārasamāropasyaitad adhivacanam. ye 'dhimāne caranty, adhikārasamārope te caranti, na te samacāriṇaḥ.*

(48) Tib: *yang dag par rdzogs pa'i sangs brgyas nyid ni brjod pas rab tu phyae ba ma yin no.* Ch1: 爲佛所言平等覺者不有所獲無所言行。Ch2: 諸佛不可以言相說故。Ch3: 諸佛如來非彼言語而得名故。

(49) Tib: *ji gzugs kyi mtshan nyid kyi chos las tha dad du rab tu dbye'am.* Ch1: 難獲之相而有 (→ 爲) 說法爲念行乎。Ch2: 諸佛可離色身三十二相諸功德法而說相耶。Ch3: 諸佛如來可離色法而得名耶。Tib は *rūpalakṣaṇadharmā* を「色の相の法」としているが、文脈から見てここは Ch2 のように「色と相と法」と取るべきであろう。

(50) Tib: *smras pa.* Ch2: 所以者何。Ch3: 文殊師利, 何以故。藏訳はすべての伝本で「言う」としているが、3 漢訳は前後を一連の会話と見なしている。藏訳のように読んでも、前後の文脈から同じヴィジェーシャチンティンの発言になる。

なされたのです<sup>←(51)</sup>。それゆえ、正等覺者 (\*samyaksambuddha) とされるのです」

(XXVI-1)

そのとき、世尊に対し、偉大なサーラ樹の如きバラモンの子であるサマターヴィハーリンがこう申し上げた。「世尊よ、どのようにしたら菩薩たちは、大乘に〔向かって〕出発した (\*saṃprasthita)<sup>(52)</sup> とされるのでしょうか」

さて、そのとき、世尊は、これらの詩頌 (\*gāthā) を仰せになられた。

(XXVI-2) 菩薩の不二の菩提行

- 1 彼ら巧みな人たちは、色 (\*rūpa) を滅そうとして悟りへと向かうのではない。色のままに悟りはある、という風に、巧みな人たちは行動する。
- 2 真如という観点から表示 (\*prabhāṣita) すれば、色のままに悟りはある。<sup>(53)</sup>→ 優れた巧みな人たちは、悟りを分析 (yongs su dbye ba) して〔から、その中に〕入るのではない。<sup>←(53)</sup>
- 3 <sup>(54)</sup>→ 悟りは意味 (\*artha) を分割 (\*bheda) することがない。悟りは意味を対象とはしない。この至高の意味 (\*paramārtha 勝義) に向かつて懸命に努力する (\*abhiyukta) 人たちが悟りへと入る。<sup>←(54)</sup>
- 4 (五) 蘊、(十八) 界、(十二) 処に〔無知なままに〕<sup>(55)</sup> [P81b] 悟りを求める。〔しかし〕悟りはそれ (蘊・界・入) を自性 (\*prakṛti) としている。それを別にして、悟りはない。
- 5 [巧みな人は]<sup>(56)</sup> 上、下、中の諸法を、決して取らず、どれも捨てない。そのとき、悟りに正しく入っている。
- 6 彼らは、法と非法の二つも、二つでないもの (不二) も、決して認めることはない。〔そういう〕彼らは悟りに入っている (\*praviṣṭa)。
- 7 無為が不二であり、有為が二であるなら、これは二つの極端 (\*anta) である。〔それを〕捨てて彼らは菩提行 (悟りに到る行) を行じる。
- 8 凡夫〔の域〕を超えているけれども、不変異 (\*avikāra)<sup>(57)</sup> には住しない。果を得ることもないが、聖人である。〔そういう〕彼らは、世間の福田である。
- 9 世間法をよく観察し、世間にあつて、蓮華のように〔世間に汚されることなく〕、すぐれた行を行じる。〔そういう〕彼らは、悟りに入っている。
- 10 <sup>(58)</sup>→ 世間が行じているところで彼らも行じるが、世間が愚かになっていることについては巧みである。〔そういう〕彼らは解脱している。<sup>←(58)</sup>

(51) Ch1:曉了一切諸法悉爲本淨自然無本、逮平等覺。Ch2:通達諸法性相如故。Ch3:皆以通達一切法性清淨眞如、如彼眞如、如是而證。

(52) Tib:yang dag par zhugs pa. Ch1:志。Ch2:發行。Ch3:住。

(53) Ch1:所願無所壞 則道第一慧。Ch2:不壞諸法性 是名行菩提 不壞諸法性 則爲菩提義。Ch3:不壞諸法性 是點慧菩薩 不壞諸法性 則爲菩提義。

(54) Ch3:是菩提義中 亦無有菩提 正行第一義 是名住菩提菩薩點慧人 如是解菩提。

(55) Ch2, 3 にのみ見られる。Ch2, 3:愚於陰界入 而欲求菩提。

(56) Ch2, 3 にのみ見られる。Ch2:若有諸菩薩。Ch3:點慧諸菩薩。

(57) Tib:mi 'gyur ba. Ch1:寂然。Ch2, 3:法位 (\*dharmaniyāmatā)。

(58) Ch3:世間行何處 菩薩彼處行 一切諸世間 悉沒何等法 點慧如實知 於中得解脱。

- 11 彼らは輪廻に汚されない。菩薩は畏れることがない。衰弱することなく、気落ちすることもない。〔そういう〕彼らは菩提行を行じる。
- 12 そのように巧みであり、法界のありかた (\*dharmadhātunaya)<sup>(59)</sup> をよく吟味して理解している彼らは、法と非法というこの点についても巧みであり、〔それを〕分別することがない。
- 13 彼らは、菩提行を行じながらも、諸法を滅することなく、いかなるものも生ずることがない。これが悟りの特質 (\*lakṣaṇa) である。
- 14 一切諸法は特質を欠いている (\*alakṣaṇa 無相)。虚空に等しく、平等である。巧みな彼らは、<sup>(60)</sup>→ 特質に根拠があるとか、特質に根拠がないとか、<sup>(60)</sup> 決して考えない。
- 15 <sup>(61)</sup>→ 行に巧みであり、方便の究極に達している巧みな人たちは、衆生の願い (\*āśaya) を成就させる。<sup>(61)</sup>
- 16 常に正法を保持し、明証性に住し<sup>(62)</sup>、法に対して慢心 (\*manyānā) しない。<sup>(63)</sup>→ これが私の法である<sup>(63)</sup>。
- 17 <sup>(66)</sup>→ 諸仏が生まれても、あるいはまた、勝者 (\*jina) [たち] が生まれなくても、<sup>(64)</sup>→ 一切諸法は空である<sup>(64)</sup>。 [P82a] 彼らは、<sup>(65)</sup>→ かの法則性 (\*dharmatā 法性) を捨てることはない<sup>(65)</sup>。<sup>(66)</sup>
- 18 諸法をすべて現観して、法の法則性 (\*dharmadharmatā) つまり真如に住して、<sup>(67)</sup>→ 彼らは堅実 (\*drḍha) にしっかりと説く<sup>(67)</sup>。
- 19 魔は、〔彼らの〕甚深なる行いの底を常に知ることはないだろう。このように、〔巧みな〕彼らは、諸法に対して執着することはまったく (\*aśeṣatas) ない。
- 20 仏知 (\*buddhajñāna) を求めているも、〔その中に〕すっかり入ってしまうという行動の余地はない。〔彼らの〕知は、<sup>(68)</sup>→ 場所に住すること (\*deśastha) も、方位に住すること (\*pradeśastha) もない<sup>(68)</sup>。

(59) Tib:chos kyi dbyings kyi tshul. Ch1:法性. Ch2:法性眞實相. Ch3:法性相.

(60) Tib:mtshan gzhi mtshan gzhi med. Ch1:無相不無相. Ch2, 3:是相是可相.

(61) Ch3 はこの第 15 偈を欠く.

(62) Tib:mngon pa nyid la rab tu gnas. Ch1:住立於平等. Ch2:常住於平等. Ch3:以住於平等.

(63) Tib: 'di ni nga yi(CP:nga 'i, B:de 'i) chos yin te. Ch1:是則爲正法. Ch2:是則如來法. Ch3:平等即是法.

(64) Ch1:常住於正法. Ch2:是法常住世. Ch3:一切諸法空. Ch1, Ch2 は dharmasthitatā dharmaniyāmatā などの原語が想定される. 注 66 参照.

(65) Ch1:斯能奉經典. Ch2:是名護持法. Ch3:不捨彼法體.

(66) この第 17 偈は、阿含經に見られる有名な一節を踏まえている。SN II 25.18-20:「如来が生まれても、あるいはまた、如来が生まれなくても、この道理(縁起)は定まっており、諸法を成り立たせる性質をもち、諸法を決定づける性質をもち、これの縁となる性質をもつ」uppādā vā tathāgatānam anuppādā vā tathāgatānam ṭhitā va sā dhātu dhammaṭṭhitatā dhammaniyāmatā idappaccayatā. 『二万五千頌般若經』では、dhammaniyāmatā が tathatā(真如), dharmadhātu(法界), bhūtaḥkoṭi(実際)とともに sūnyatā(空性)の同義語とされている (Pvsp 132.3-8)。

(67) Ch1:所説亦如斯. Ch2:而爲人演説. Ch3:爲於衆生説.

(68) どこにも存在しないことを示す慣用的表現. 五島 [2012]150 頁, 注 150 参照. Ch1:則無有慧教所説無所獲. Ch2:是慧於十方 求之不可得. Ch3:智不有住處 非不住異處.

- 21 仏知は無礙であり、<sup>(69)</sup>→法と〔非〕法とに執着することがない<sup>←(69)</sup>。悟りを究極の目的としている彼らは、そのように、執着することがない。

## (XXVI-3) 布施波羅蜜

- 22 布施によって常に向上していき、心を制御することを喜んでいる彼らは、すべてを捨てても、<sup>(70)</sup>→落ち込んだ気持ち(\**dīnacitta*)になることはない<sup>←(70)</sup>。
- 23 法は捨てることが出来ないし、取ることもできない。そのように、一切諸法に<sup>(71)</sup>→＜私のもの＞は存在しない<sup>←(71)</sup>。
- 24 <sup>(72)</sup>→一切諸法は縛にあらざ、解脱にあらざと知って<sup>←(72)</sup>、〔間違つた〕見解(邪見)をもたない人は、偉大な施主(\**mahādānapati*)である。
- 25 我・我所を見ることがない彼らは、それゆえ、布施するときには、<sup>(73)</sup>→いかなる物にも依拠しない<sup>←(73)</sup>。
- 26 一切の布施・喜捨を悟りへと振り向け、悟りに向かって布施するが、〔悟り、布施という〕二想を生じることはない。

## (XXVI-4) 持戒波羅蜜

- 27 <sup>(74)</sup>→形成作用のない(\**asaṃskāra*)戒<sup>←(74)</sup>に常に決定して住する彼らには、＜私は戒に住している＞という慢心(\**manyānā*)がない。
- 28 巧みな人は、戒が作られるものでもなく、生じるものでもないことを知っている。それゆえ、彼の戒は、虚空のように清浄で無垢である。
- 29 身体は〔水や鏡に映つた〕映像(\**pratibimba*)のようであり、ことばは木霊(\**pratiśrutkā*)のようであり、心は幻(\**māyā*)のようであると知って、彼らは戒を誇る事が出来ない。
- 30 <sup>(75)</sup>→彼らは〔心身ともに〕静まり(\**śānta*)、寂静であり(\**praśānta*)、極めて平静である(\**upaśānta*)、<sup>←(75)</sup>深い精神集中に入っている(\**samāhita*)。一切の悪を鎮めており、寂静(\**praśānta*)の極致に達している。
- 31 破戒と持戒と、[P82b]彼らにはその二つはない。法界をよく知って、彼らの戒は無漏である。

## (XXVI-5) 忍辱波羅蜜

- 32 忍辱の彼岸に渡り、悪行のすべてに耐え、そのように、一切の衆生に対して彼らの思い

<sup>(69)</sup> Tib:chos dang chos la chags mi byed. Ch1:於法不著法。Ch2, 3:不著法非法。

<sup>(70)</sup> Tib:zhan(CDHNP:zhen) pa'i sems kyi(BCDHNPPh:ni) yongs(B:yang, CHNPh:yong, DP:yod) med do(Ph:na). Ch1:不著於佛道。Ch2, 3:而心不傾動。

<sup>(71)</sup> Tib:bdag gi dngos po yod ma yin. Ch1:不得心形像。Ch2:根本不可得。Ch3:我本不可得。

<sup>(72)</sup> Ch1:致究竟解脱 曉了一切法。Ch2:能知一切法 非施非捨相。

<sup>(73)</sup> Tib:dngos po ci la'ang rten mi 'gyur. Ch1:不處於貢高 不慕諸所有。Ch2, 3:不生貪惜心。

<sup>(74)</sup> Ch1:禁戒無所行。Ch2, 3:無作無起戒。

<sup>(75)</sup> *Dbh* 40.13: śāntaprasāntopaśāntaś ca bhavati.

は等しく働く。

- 33 一切諸法は止まることがなく、刹那滅のあり方で壊れていく。このことについて、腹を立てて非難すること (\*ākrośa) も、敬意を表することもない。
- 34 身体を切り刻まれても彼の心に怒りは生じない。〔彼の〕心は身体の内にも外にも全く存在しない。
- 35 〔地水火風〕の四つの元素（四界）より生じた<sup>(76)</sup>→この身体は敵に等しい←<sup>(76)</sup>。<sup>(77)</sup>→〔そのように〕正しく理解する彼ら巧みな人たちは、自らを誇ることがない。←<sup>(77)</sup>
- 36 そのように現観しているので、<sup>(78)</sup>→彼らは忍辱を語る←<sup>(78)</sup>。人々は、彼〔ら〕の心を脅かすこと (\*dūṣaṇa) は決してできない。

#### (XXVI-6) 精進波羅蜜

- 37 <sup>(79)</sup>→彼らは大いなる精進を開始し、力を有し、堅固であり、畏れることがない。←<sup>(79)</sup> 彼らは身心をよく理解しているので、それら（身心）に依拠することはない。
- 38 <sup>(80)</sup>→輪廻の始まりの究極から捉えたとしても、不生なのである。←<sup>(80)</sup>〔それでも〕一人の人 (\*sattva) のために、大力ある人たちは〔精進の〕鎧を身に着ける。
- 39 法はいかなるものも、生起することなく、発生することもないが、愚かな人は〔考え方が〕顛倒しているので、前際 (\*pūrvānta 過去) を理解しない。
- 40 <sup>(81)</sup>→この界 (\*dhātu) は常に住している。←<sup>(81)</sup>法界 (\*dharmadhātu) は不可思議である。そのように正しく知れば、ここにおいて生もなく滅もない。
- 41 これらの法の法則性 (\*dharmadharmatā)<sup>(82)</sup>を、これらの人たちは理解しない。それゆえ、その顛倒を捨てさせるために、彼らは努力する。
- 42 <sup>(83)</sup>→完全円満なる仏陀も、〔輪廻する〕生き物 (\*sattva) がどのようなものであるか完全に把握することはない。←<sup>(83)</sup>〔それでも〕鎧を捨てることなく、精進のすぐれた点を見なさい。
- 43 <sup>(84)</sup>→〔彼らは〕諸法を、幻や陽炎 (\*marīci) のようなものだと考える。←<sup>(84)</sup>ここには

(76) Ch1:如能忍怨讐。Ch2, 3:身怨及刀杖。

(77) Ch1:終不爲惡行 忍辱猶若地。Ch2:於地水火風 未曾有傷損。Ch3:點慧悉現見 名爲忍辱人 於地水火風 未曾有傷損。

(78) Tib:de dag bzod par (KLT:pa) smra ba yin. Ch1:乃名曰忍辱。Ch2, 3:常行忍辱法。

(79) Ch1:勸助樂大乘 勢強無所畏。Ch2, 3:勇猛勤精進 堅住於大乘。

(80) Ch1:因從始原際 生死不可知。Ch2, 3:雖知生死本 其際不可得。

(81) Tib:dbyings 'di rtag tu gnas pa ste. Ch1:諸種立天眼。Ch2:常住於世間。Ch3:法性常爾住。注 66 參照。

(82) Tib:chos kyi chos nyid(CDHKLN:ni) 'di rnams ni. Ch1:諸法與非法。Ch2, 3:法相。第 18 偈參照。

(83) Tib:sems can rdzogs pa'i sangs rgyas kyis, ji lta(T:ltar) bur yang yong(CDP:yod, B:yang) ma brnyes(T:rnayed, K:rnyses, L:bsnyes, CDHNP:snyems). Ch1:諸佛不得入(人) 究竟無所有。Ch2:諸佛常不得 衆生決定相。Ch3:諸佛常不見 衆生決定相。

(84) [引用]『修習次第・後編』(Bhāvanākrama III)

Skt: (punas tatraivoktam /) pravicinvantī te dharmān yathā māyā marīcīkā iti / (Bhk 19.13-14)

Tib: (yang de nyid las) de dag gi<sup>1</sup> chos rnams la sgyu ma dang smig rgyu ji lta ba bzhin du rab tu rnam par 'byed do // (Peking ed. dBu-ma A 63b) I) Read gis.

一郷 [2011]116 頁參照。

堅実なもの(\*sāra)はなく、まるで虚空を見ているようである。

- 44 巧みでない人は、非存在なものについて妄想分別(\*parikalpa)することで、〔煩惱に〕汚される。(85)→そういう人に〔巧みな人は〕涅槃の[P83a]の知について語る。(85)  
 45 彼の精進はそのためであって、存在(\*bhāva, vastu)を滅するためではない。(86)→存在も非存在も無常なものであるから、彼らには精進が生じるのである。(86)

(XXVI-7) 禪定波羅蜜

- 46 遠離に常に住して、(87)→無諍(\*araṇa)の〔境地〕を体得する(87)。その心は輪廻を恐れ、(88)→慣れ親しむこと(\*saṃstuta)もなく、信じること(\*viśvāsa)もない(88)。  
 47 「巧みな人は、森の中で行じて堅固であり、常に犀のごとくである(\*khaḍgaviṣāṇakalpa)」(89)と理解して、自由(\*krīḍita)を知る人たち(90)は、勝れた智(\*abhijñā 神通)を体得する。  
 48 森のように、〔人のいない〕村落(\*sūnyagrāma)(91)のように、平等性に住しているので、修行や威儀(\*caryā-īryāpatha)を気に掛けず、つねに彼らは三昧に入っている(\*samāhita)。  
 49 いかなる時も穏やかな(\*samāhita)法は寂静(\*upaśānta)であり、無漏であると信解して〔その心が〕解脱している場合、それゆえ、〔そういう彼らのことを〕「三昧に入っている(\*samāhita)」と〔如来は〕仰せになる(92)。(93)  
 50 平等(\*sama)に行い、平等に進む、平等性(\*samatā)に住し、平等性に違うことはしない。それゆえ、〔そういう彼らのことを〕「三昧に入っている(\*samāhita)」と〔如来は〕仰せになる。  
 51 菩提心を始めとしてあらゆる種類の心から、彼らは惑わされることなく、人々を成熟させる。〔そういう〕彼らのことを「三昧に入っている」と〔如来は〕仰せになる。  
 52 仏陀は法身(\*dharmakāya)である。如来を〔そのように〕常に念じて、色〔身〕に対する執着から離れていることが出来ている。それゆえ、〔そういう彼らのことを〕「三昧に入っている」と〔如来は〕仰せになる。  
 53 法の法則性(\*dharmadharmatā)の通りに、彼らは諸法を修習するが、憶念すること

(85) Tib:gang gis(BCDHNP:gi) mya ngan las 'da' ba yi, rig(KLPh:rigs) pa dag ni de(CDHN:'di) la bshad. Ch1:以故説平等 得至于滅度. Ch2, 3:爲斯開法門 令得入涅槃.

(86) Tib:dngos dang dngos med mi rtag phyir, de dag gi ni brtson 'grus bskyed(BKLTPh:skyed). Ch1:行所行離行 精進最爲上. Ch2, 3:離法非法故常行眞精進.

(87) Tib:nyon mongs med par rtogs par rig. Ch1:遵修于空義. Ch2:了達無諍定. Ch3:以得無諍定.

(88) Tib:'dris pa med cing yid mi rton(B:rtog, CDHPN:ston). Ch1:勿信於虛偽. Ch2:獨處無憤鬧. Ch3:獨闇俱不住.

(89) Cf. *Sn* v.39.

(90) Tib:rtsen par(KL:rtsen pa'i, BPh:rtsen pa, CD:btsan pa, HN:btsan par, T:brtson pa'i, P:brtson par) rig pa dag. Ch1:慧者娛樂禪. Ch2:遊戲諸禪定. Ch3:遊戲諸禪定.

(91) Ch1:聚閑居然. Ch2, 3:空閑聚落. Cf. *SN* IV 173.21-31(suñña-gāma)

(92) Tib:gsungs. Ch2,3:説.

(93) Ch3 のみ次の 1 偈を加える. Ch3:來去皆平等 彼常住平等 不滅於平等 故説住平等.

(\*smṛti)〔自体〕に注意を集中(\*manasikāra)しているわけではない。それゆえ、〔そういう彼らのことを〕「三昧に入っている」と〔如来は〕仰せになる。

- 54 僧団を憶念することを修習するが、僧団自体は無為である。<sup>(94)</sup>〔それを計る〕基準はなく(\*apramāṇa)、寂靜ではあるが、<sup>←(94)</sup>〔その中で〕巧みな人たちは、禪定を修習する。

#### (XXVI-8) 智慧波羅蜜

- 55 人々(\*dehin)には、十方において、〔仏〕国土と仏陀たちが見える。<sup>(95)</sup>→彼らは、〔見ている〕眼と〔見えている〕もの(\*rūpa)について、二つの想を起すことはない。<sup>←(95)</sup>
- 56 諸仏が説いた法をあらん限り聴聞するが、彼らが声と耳の二つについて想を起すことはない。
- 57 彼らは [P83b] 一心(\*ekacitta)によって衆生(\*sattva)の心(\*citta)を理解するが、<sup>(96)</sup>→彼らが、心や衆生を分別(\*vikalpa)することはない<sup>←(96)</sup>。
- 58 <sup>(97)</sup>→ガンガー〔河の〕砂の数にも等しい〔不可数の〕劫(\*gaṅgānādivālukāsamakalpa)を、〔その〕砂の数ほど、憶念したとしても、<sup>←(97)</sup>彼らに、前であるとか後であるという、この戯論(\*prapañca)<sup>(98)</sup>は生じない。
- 59 〔彼らは〕幾千コーティもの、考えることが出来ないほどの〔数の〕仏国土に化身として趣く。<sup>(99)</sup>→〔それは〕心としてでもなく、身体としてでもなく、それとは別のものとしてでもない。<sup>←(99)</sup>
- 60 〔彼らは〕諸法を表示することを知っており、ひらめきに基づく説法(\*pratibhāna 楽説)に通じている。諸法界<sup>(100)</sup>の教示を、幾コーティもの劫にわたって語る。
- 61 〔彼らは〕智慧の彼岸に至り、〔五〕蘊を巧みに学んでいる。執着(\*grāha)もなく、戯論もない、〔そういう〕すぐれた法を説く。
- 62 彼らは縁(\*pratya)に巧みであり、二辺を捨てている。彼らは、〔輪廻の〕原因たる煩惱に罪はなく、清浄であることを知っている。
- 63 <sup>(101)</sup>→縁〔というもの〕を信解すれば、邪見は存在しない。このように、一切諸法は、縁に依拠しているので、自性(dngos po, \*bhāva, vastu)はない。<sup>←(101)</sup>

<sup>(94)</sup> Ch1:離於數無數。Ch2:離數及非數。Ch3:離於數寂靜。

<sup>(95)</sup> Cf. *VKN* ch.8, sec.19:「眼と色が、かの二です。眼をよく知る者は諸色に執着せず、怒らず、愚かになりません。それゆえ、<寂靜である>と言われるのです」cakṣū rūpaṃ ca dvayam etat / yat punaś cakṣuḥparijñātāvī rūpeṣu na rajyati na duṣyati na muhyati, sa ucyate śānta iti /

<sup>(96)</sup> Ch1:無人亦無意 則無有衆想。Ch2, 3:自心及彼心 此二不分別。

<sup>(97)</sup> Ch1:識念億萬劫 猶江河沙劫。Ch2:憶念過去世 如恒河沙劫。Ch3:憶念過去際 如恒河沙劫。

<sup>(98)</sup> Tib:spro pa. Ch2, 3:分別。大乘經典における prapañca の意味には大別して、1) 妄想分別(\*vikalpa) にほぼ同義、2) 間違った見解を持ちそれを言葉として表現すること、3) 動揺のない寂靜たる真理を二元対立(分別)の世界に引き出す(言語化する)行為、の3つが考えられるが、ここは1)の意味。

<sup>(99)</sup> Tib:lus la'ang med cing sems la'ang med, de las gud na'ang yod ma yin. Ch1:於時明哲者 身口心不亂。Ch2:而於身心中 無有疲倦想。Ch3:而於身心中 無有疲倦相。

<sup>(100)</sup> Tib:chos kyi dbyings rnam. Ch1:法性。Ch2, 3:法性相。

<sup>(101)</sup> [引用]『般若燈論』(*Prajñāpradīpa*)

- 64 我見，仏見，空見，涅槃・輪廻見は，すべて，彼（巧みな人）には存在しない。  
 65 彼らは，智慧の本質（\*prajñāsvabhāva）<sup>(102)</sup>を知り，〔そのことによって〕智慧が輝くやいなや，闇を離れ，欲が無くなり，菩提行を行じる。

## (XXVI-9) 大乘の称讃

- 66 この大乘という乗り物は，不可思議の仏乗である。衆生を受け入れる（\*avakāśaṃ dadāti）無上の大乘である。  
 67 あらん限りの乗り物の中で，これはその中の最上のものと考えられる。<sup>(103)</sup>→ それゆえ，一切の乗り物は大乘から力を得ている（\*prabhāvita）←<sup>(103)</sup>。  
 68 他の乗り物は，小さくて（\*alpa），すべてを受け入れることはない。この大乘には，すべての人（\*dehin）を受け入れる容量がある。  
 69 虚空のごとく [P84a] 汚れない大乘に入った人たちは，すべての人に対して物惜しみの気持ち（\*mātsarya）がない。  
 70 ちょうど虚空が，大きさに限りがなく，色・形（\*rūpa）もなく，〔これと〕指し示すことができないように，この大乘は無量大であり，障碍というものがない。  
 71 もし一切衆生が，すぐれた乗り物（\*varayāna）を欲するなら，すべてを受け入れる乗り物の特性（\*viśeṣa）を見なさい。  
 72 大乘の功德とそれに乗っている人たちとの称賛の究極を，幾コーティもの劫をかけても，語り尽くすことはできない。<sup>(104)</sup>

## (XXVI-10) 經典の功德

- 73 この經典から，わずか4句の詩頌（\*gāthā）であれ，護持する人たちは，諸難（\*akṣaṇa）から護られる。〔そういう〕巧みな人たちは，よき状態（\*kṣaṇa）を得る。  
 74 この經典を喜ぶ人たちは，もはや悪い生存状態（\*durgati）に趣くことはない。彼らは神々や人間となる。  
 75 極めて怖ろしい（\*mahābhaya）後の時代において（\*paścime kāle）この經を聞いた人は，すべて悟りへ決定していると，私は予言（授記）する。  
 76 彼〔ら〕の手には〔この經典という〕法がある。彼らは正法に住している。この法に住して，彼らは法輪を転じる。

[Ch] : 如 梵王所問經 偈言。

深解因縁法 則無諸邪見 法皆屬因縁 無自定根本 (A)

因縁法不生 因縁法不滅 若能如是解 諸佛常現前 (B) (Taisho vol.30 135b22-24)

\* A 偈のみ BP からの引用。B 偈の出典は不明だが、『華嚴經』の「一切法無生 一切法無滅 若能如是解 諸佛常現前」(Taisho vol.9 442b12-13) が内容的には近い。

[Tib] : \*\*\*\*\*

<sup>(102)</sup> Cf. VKN ch.8, sec.20: 「一切智者性は，まさに智慧を本質としている」 prajñāsvabhāvaiva sarvajñatā.

<sup>(103)</sup> Tib: de phyir theg pa chen po las, theg pa thams cad rab tu dbye. Ch1: 如是於彼乘僉了一切學。Ch2, 3: 如此大乘者能出生餘乘。

<sup>(104)</sup> Ch3 は次の1偈を加える。Ch3: 若住此大乘 彼人離諸難 得值諸無難 此是智慧人。

- 77 この経典を護持する人たちは、無量の劫の間、輪廻して、完全な悟り (\*saṃbodhi) に近づく。<sup>(105)</sup>→ 彼らは偉大性 (\*māhātmya) を捨てる。<sup>←(105)</sup>
- 78 この道理 (\*naya 法門) を護持する人たちは、魔の軍隊を打ち破ることができる勇者である。大精進があり、大智慧がある。
- 79 <sup>(106)</sup>→ 私が忍 (\*kṣānti) に住するとき〔に關して〕、燃灯 (\*Dīpaṃkara) 〔仏〕が予言をしたように、<sup>←(106)</sup> そのとき、経典を喜ぶかれらには〔成仏の〕予言をしよう。
- 80 救済者 (\*trāyin) であり、世間〔の人々〕を救い出す人 (\*uttārayitr) である仏陀が〔この世に〕生じないとき、この経典を語る人が、仏陀のなすべき仕事をなすであろう。

## (XXVI-11)

この〔新たに〕説き出された (\*abhinirhṛta) 詩頌が語られた時、五千<sup>(107)</sup>の天子たちが、悟り<sup>(108)</sup>に向けて心を起こした。二千の菩薩たちもまた、法は本来生じることにはないと容認する智慧 (\*anutpattikadharmakṣānti 無生法忍) を起こした。千を越える<sup>(109)</sup>比丘たちは、執着がなくなって (\*anupādāya)、その心は漏から自由になった (\*āsravebhyāś cittāni vimuktāni)。三万二千の命あるもの (\*prāṇin) たちは、その諸法に対する法の眼が、塵無く、汚れなく、[P84b] 清浄になった (\*virajo vīgatamaḷaṃ dharmeṣu dharmacakṣur viśuddham)。

## (XXVII-1)

その時、世尊に対してマンジュシュリー法王子は、次のように申し上げた。「世尊が語られたことを私が理解したことによれば、悟りのために誓願することは、邪見を誓願することです。なぜなら、世尊よ、対象化することは邪だからです。それゆえ、悟りを対象とし、〔その〕対象化された〔悟り〕を誓願する人々の努力は、邪なのです。なぜなら、世尊よ、悟りは欲界にはなく、色界にもなく、無色界にも存在しないからです。<sup>(110)</sup> 世尊よ、悟りは抛り所がない (\*asthāna) のですから、それを誓願することはないのです。世尊よ、たとえば、ある人が、『私は虚空を手に入れよう』と言って、虚空に向けて誓願したとして、彼は虚空を手に入れるでしょうか」

〔世尊が〕仰る。「マンジュシュリーよ、そのようなことはない」

マンジュシュリーが申し上げる。「世尊よ、そのように、虚空に等しい悟りを願っている人々は、虚空を願っているのです。世尊よ、悟りは願うものではありません。〔過去・現在・未来の〕三世を超越し、<sup>(111)</sup>→ 近づくことのないものです<sup>←(111)</sup>。世尊よ、二つの想 (\*saṃjñā) を起こして、『悟りと邪見は別のものであり、悟りと涅槃は別のものである』と願う菩薩たちは、

<sup>(105)</sup> Tib:bdag nyid chen po de dag spong. 3漢訳にはこれに対応する訳は見られない。

<sup>(106)</sup> Ch1:猶如錠光佛 授決得法忍. Ch2:我於燃燈佛 住忍得受記. Ch3:燃燈授我記 令得無生忍。

<sup>(107)</sup> Ch1:十千。

<sup>(108)</sup> Ch1:無上正眞道. Ch2, 3:阿耨多羅三藐三菩提。

<sup>(109)</sup> Tib:stong lhag tsam. Ch1:千. Ch2, 3:十千。

<sup>(110)</sup> Ch1 はここに次の一節を有す。Ch1:譬如男子而取段鐵。燒著火中不欲願火不當手觸。所以者何。燒人手故。火不自燒取者燒耳。其有志願求佛道者則爲求火而自燒耳。

<sup>(111)</sup> Tib:nye bar mi mchis pa lags te. Ch1:無所住. Ch2, 3:非是受相。

悟りに向かって行動を起こしているのではありません」

(XXVII-2)

その時、ブラフマー神であるヴィシェーシャチンティン (V) は、マンジュシュリー法王子 (M) にこう言った。「マンジュシュリーよ、菩薩はどのように行じたら、悟りを行じたことになるのですか」

〔Mが〕言う。「ブラフマー神よ、[P85a] 一切諸法を行じながら、いかなる法も行じることがなければ、菩薩は悟りを行じているのです。ブラフマー神よ、行の範囲を超越した菩薩が悟りを行じるのです」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、どうしたら菩薩は行の範囲を超えて悟りを行ずるのですか」

〔Mが〕言う。「対象や記号 (\*ālabhananimitta) をすべて離れ、眼・耳・鼻・舌・身・意〔という知覚器官・思考器官〕を離れているかのように〔行じている〕場合、行のすべての範囲を超越している (shin tu 'das pa, \*atikrama) のです」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、完全に超越する (yang dag par 'das pa, \*samatikrama) とは何を意図した〔ことばなの〕ですか」

〔Mが〕言う。「<sup>(112)</sup>→ 平等性 (\*samatā) を超越しないこと (\*akrama) を〔意図しています〕。←<sup>(112)</sup> なぜなら、ブラフマー神よ、悟りとは、一切諸法の平等性のことだからです」

<sup>(113)</sup>→ 〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、菩薩はどのようにしたら悟りに入るのですか」

〔Mが〕言う。「悟りのあるがままに」

〔Vが〕言う。「悟りとはどのようなものなのですか」

〔Mが〕言う。「ブラフマー神よ、その悟りとは、過去でもなく、未来でもなく、現在でもない。それゆえ、菩薩は、三世清浄相と三輪清浄によって悟りへと入るべきなのです。←<sup>(113)</sup> 過去のごとく、未来のごとく、現在のごとく、不生のごとくにです。不生たるものには、表示される (\*prabhāvita) ことがありません。そのように理解した者は、何ものにも入ることがないのです。なぜなら、この〔ような〕理解によって、一切知者の知 (\*sarvajñajñāna) を得るでしょうから」

<sup>(112)</sup> Tib:mnyam pa nyid las mi 'da' ba'o. Ch1:平等於乘則爲超度. Ch2:不出過平等. Ch3:不過平等.

<sup>(113)</sup> [引用] 『大乘掌珍論』

〔Ch〕: (如有.) 問言. 曼殊室利, 云何菩薩趣大菩提. 答言. 梵志, 應如菩提. 復問. 云何名爲菩提. 答曰. 梵志, 此非過去亦非未來及以現在. 是故菩薩應觀三世皆清淨相三輪清淨趣. (Taisho vol.30 273b16-20)

なお、時間の三時清浄といわゆる三輪清浄の関係については、『三昧王経』に次のようにある始めを知っており、結末を知っている。スガタの教えでは〔過去現在未来の〕三時は平等であり、施主と受者と施物（三輪）の区別の断滅を説く、勝者、法主はかくのごとく説法された。

pūrīvāntajñānam aparāntajñānam triyadhvasamatā sugatāna śāsane /  
pariccheda uktaḥ sa trimaṇḍalasya evaṃ jino deśayi dharmasvāmī // SR ch.17 v.77 //

また、次に挙げる『華嚴経』（「入不思議解脱境界普現行願品」）も参考になる。「汝應勤修三世平等、謂三世行相。雖各不同但隨住法有差別故。汝應勤修三輪清浄、謂過現未來一切諸法。性不可得離心意故」(Taisho vol.10 803a7-10)

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、どうして、一切知者の知といわれるのですか」

〔Mが〕言う。「<sup>(114)</sup>一切を知る知が、一切知者の知といわれるのです<sup>←(114)</sup>」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、一切知とは何ですか」

<sup>(115)</sup>〔Mが〕言う。「ブラフマー神よ、一切知には存在性 (\*bhāva, vastu) がなく、一切知〔自体〕をすべて知ることはありません。それを一切知といいます。〔あらゆる〕存在がそうであるように、そ〔れについて〕の一切知も [P85b] 存在しないのです」

〔Vが〕言う。「どうして、存在性 (\*bhāva, vastu) がないのですか」

〔Mが〕言う。「存在は、名称の本質 (\*nāmasvabhāva) という点で、遠離しています。その名称と本質とが遠離している場合、存在と悟りとはそれぞれ別のもではありません。かりに、存在と悟りとがそれぞれ別のものだとしても、このように、この場合、悟りのままに存在もあるのです。<sup>←(115)</sup>それゆえ、この場合、衆生 (\*sattva) も別なものとしては存在していないので、それが別の相のものとして理解されることはありません。別の言い方をすれば (\*anyathā), 我の平等性によって悟りが〔理解され〕、悟りの平等性によって我の平等性が理解されるのです。そのようにして、悟りは理解されます。別のものではないのですから、それゆえ、そこに変異というものは存在しないのです。我は常に無我なのです。それゆえ、そこには変異の相なるものはありません。虚空には変異の相がないように、一切諸法にも変異の相はないのです。それ故、菩薩とは言われぬ」

### (XXVII-3)

そのときブラフマー神であるヴィシェーシャチンティンはマンジュシュリー法王子に次のように言った。「このようなものとして、これらの諸法を表示するから、如来は真実 (\*satya) をお話しになられたのです」

〔Mが〕言う。「ブラフマー神よ、如来はいかなる法も表示しません。なぜかといえば、如来は法というものさえ対象化しないのですから、ましてや、何ものも表示したりしないことは

<sup>(114)</sup> Ch1:悉達一切不以爲智. Ch2:悉知一切眞智慧. Ch3:一切悉知.

<sup>(115)</sup> この部分で、3漢訳はいずれも、「存在 (\*bhāva, vastu)」に相当する語を「衆生 (\*sattva)」とし、この部分を「悟り (\*bodhi)」と「衆生」の無変異・平等の観点からの対論としている。これは「菩薩 (bodhi-sattva)」の語における bodhi (悟り=一切知者性) と sattva (衆生) との関係を論じたものなのであろう。また、原文に sattva とあったとすれば、蔵訳は、それを sat-tva (存在性, 実在性) と取ったのかも知れない。

なお、「名称の本質 (ming gyi rang bzhin ここでは rang bzhin を svabhāva と解する) について『二万五千頌般若経』が参考になる。Pvsp 250.19-251.1:「実にそのように、具寿シャーリプトラよ、名称 (nāma) は、十方のどこからもやって来ず、どこにも行かず、どこにも存在しない。諸菩薩にとってもまた、一切諸法の名称こそ、どこからも来ず、どこにも行かず、どこにも存在しないのである。かの名付け (nāmadheya) は非本来的なもの (āgantuka) である。それ故、色・受・想・行・識という名付けは、色・受・想・行・色ではないのである。なぜなら、実にそのように、名称は名称の本質を欠いているからである (nāma sūnyam nāmasvabhāvena)。そして、空なるものはその名称ではないのである。それ故、菩薩とは言われぬ。それは単なる名付けに過ぎないのである」Pvsp 228.10-11:「そのように実に、スプーティよ、名称の本質 (nāmaḥ svabhāvaḥ) は、三界に属するものから出離しないであろう、一切種智性 (sarvākārajñatā) には存在しないであろう。なぜなら、そのように実に、スプーティよ、名称の本質は名称の本質を欠いているのである (nāmasvabhāvo nāmasvabhāvena sūnyaḥ)」

言うまでもありません」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、如来は『これらの法は有為である。これらの法は無為である。これらの法は世間的である。これらの法は出世間的である』という風に、諸法を御存じなのではないですか」

〔Mが〕言う。「ブラフマー神よ、このことをどう思いますか。いったい誰がこの虚空を表示したり、理解したりすることがあるでしょうか」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、そのようなことはありません」

マンジュシュリーが言う。「虚空といわれるものは、生じることや滅することがあるでしょうか」

〔Vが〕言う。「そのようなことはありません」

〔Mが〕言う。「ブラフマー神よ、[P86a] そのように、どのようなものとしてであれ、法を理解するということは、虚空を理解することなのです。法は生じたり滅したりしません。一切諸法を理解することは理解しないということなのです。かの法によってすべてを知る (\*sarvajña) 人々は、変異することないがゆえに、知ることがないがゆえに、すべてを知るのです。なぜなら、法を知ることがそうであるように、すべてを知ることともそうなのです。それゆえ、一切諸法は真如 (\*tathatā) に住しているといわれるのです。〔その〕真如〔自体〕は住することがないのです」

#### (XXVIII)

その時、四天王 (\*caturmahārāja) たち、神々の主シャクラ、サハー世界の主たるブラフマー神が、その集會に集まっていた。彼らは、諸々の天華を如来に振りかけて、次のように申し上げた。「世尊よ、良家の子、良家の子女が、マンジュシュリー法王子によるこの教示を信解するならば、魔と敵とを打ち破ります。なぜなら、世尊よ、マンジュシュリー法王子による教説は、一切の想 (\*saṃjñā) を離れているからです。この甚深の法の教示に驚かず、怖れず、恐怖しない良家の子や良家の子女たちは、劣った善根をもつものではありません。世尊よ、この法門 (\*dharmaparyāya) が現れるところは、如来が加持 (\*adhiṣṭhāna) しておられます。この甚深の法門が聞かれるところは、如来が享受 (\*paribhoga) しておられます。この法門が現れる村、まち、都市、国、僧院、経行所では、教えの輪 (法輪) が転ぜられるのが見られます。そこでは、魔が付け込むことはなく、対象に執着する人が付け入る余地もありません。世尊よ、[P86b] 昔の勝者 (\*jina) たちのところで〔なすべき〕仕事 (\*adhikāra) をなした人たちは、この法門に耳を傾けるでしょう。世尊よ、このように、我々はこの法門から法の輝きを得ました。世尊よ、如来とマンジュシュリー法王子と、このブラフマー神とに対して、私たちが自らの肉と血によっても〔その恩義に〕報いることはできません。世尊よ、〔私たちが〕この法門を聞くことになるその法師 (\*dharmabhāṅaka) に対して、私たちには『教主 (\*śāstr) である』との想いが生じます。世尊よ、その法師のお近くに、私たちは、常に、不断に、お仕え致します。その良家の子は、彼ら神々が守護するでしょう。この法門を文字に書き記し、唱え、教え、誦誦すれば、百千もの多くの天子が教え (法) を聞きに参ります」

#### (XXIX-1)

その時、世尊は、四天王たち、インドラ神、サハー世界の主シャクラに対して、こう仰せに

なられた。「よろしい、よろしい。正しい人 (\*satpuruṣa) [たち] よ<sup>(116)</sup>、汝 [ら] の言う通りである。貴き友 (\*māriṣa) たちよ、もし、一切の宝石で満たされた三千大千世界を一分とし、この法門を聞く善根を一分とした場合、その2つのうち、この法門を聞く善根の方がすぐれている。三千大千世界 [の例] は置いておいて、もし、一切の宝石で満たされたガンガー河の砂の数にも等しい [十方] 世界を一分とし、この法門を聞く善根を一分とした場合、その2つのうち、この法門を聞く善根の方がすぐれている。<sup>(120)</sup> 貴き友よ、福德を欲する良家の子、良家の子は、この法門を聞くべきである。[P87a]<sup>(117)</sup> 獲得を欲し、法を欲し、物 (\*rūpa) を欲し、<sup>(117)</sup> 財産を欲し、眷属を欲し、法の自在を欲し、天界での繁栄を欲し、人間界での繁栄を欲し、名声を欲し、説くことを欲し、聞くことを欲し、憶念、<sup>(118)</sup> 判断力、理解力、<sup>(118)</sup> 堅固さ、智慧を欲し、弁才 (\*pratibhāna) を欲し、記憶 (\*dhāraṇī) を欲し、良き友 (善知識) の獲得を欲し、<sup>(119)</sup> 神通 (\*abhijñā), 学問 (\*vidyā), 知を欲し、悟りを欲し、<sup>(119)</sup> 一切の善法を欲し、悟りに到る要件 (菩提分法) を欲し、規則 (\*vidhi) を欲し、すべての人々が安楽を得ることを欲し、涅槃を欲する、[そのような] 良家の子、良家の子は、この法門を聞くべきである。信解すべきである。保持し、理解し、記憶し、読み、他に広く教示すべきである。<sup>(120)</sup> 貴き友たちよ、<この法門を少し聞いただけでもそれに守られる>ということなくして繁栄している者など、私は見たことがない。貴き友たちよ、信解しなさい。理解しなさい。先生 (\*ācārya 阿闍梨) や師匠 (\*upadhyāya 和上) からこの法門を聞いたり、受持したりした場合、それに報いる<sup>(121)</sup> に容易な世間の財物 (\*āmiṣa)<sup>(122)</sup> など、私は見たことがない。なぜなら、これは出世間的な法であり、世間の財物によってそれを浄化する<sup>(123)</sup> ことは容易ではないからである。この法は世間によって汚されることはない。世間の財物によって浄化する<sup>(124)</sup> ことは容易ではない。この法は財物ではない。世間の財物によって浄化する<sup>(125)</sup> こと

<sup>(116)</sup> Ch3: 諸善男子。

<sup>(117)</sup> Ch1: 若爲利養若爲榮色。Ch2: 欲得身色端正。Ch3: 若有欲得身色端正。

<sup>(118)</sup> Ch2, 3: 戒定智慧解達經書。

<sup>(119)</sup> Ch1: 若求神通三達之智。Ch2, 3: 欲得三明六通。

<sup>(120)</sup> [引用] 『大乘宝要義論』 (*Sūtrasamuccaya*)

[Ch]: 梵王問經云、仁者、若善男子善女人、於如來所樂修福事者、應當於此正法聽聞信解及受持等、即能獲得色相富盛廣多眷屬於法自在人天之中受諸快樂。(Taisho vol.32 71b7-11)

[Tib]: tshangs pas zhus pa las kyang / de bzhin gshegs pas gsungs te / grogs po dag rigs kyi bu 'am rigs kyi bu mo bsod nams 'dod pas de bzhin du rnyed pa dang gzugs dang longs spyod dang g'yog 'khor dang chos kyi dbang phyug dang lha dang mi'i phun sum tshogs pa'i bar thams cad 'dod pas chos kyi rnam grangs 'di mnyan par bya mos par bya gzung bar bya'o zhes gsungs so // (SS 177.16-22) \* BP 当該部分からの抜粋。

<sup>(121)</sup> Tib: lan glan pa. Ch1, 2, 3: 報其恩。

<sup>(122)</sup> Tib: jig rten gyi zang zhing. 「世間の財物」に相当する部分を漢訳はここ以降の使用例を含めると次の様にしてある。Ch1: 俗供養, 俗養, 俗間之供。Ch2: 世間供養之供, 世間供養, 世間財物。Ch3: 世間供養, 世間財物, 世間資生飲食臥具。

<sup>(123)</sup> CDHKLNPPhT: sbyang ba. B: spyang pa. Ch1: 畢了, 相比。Ch2, 3: 報。「布施 (物) の浄化」については五島 [2009]174-176, 注 146-148, 150 参照。

<sup>(124)</sup> CNPhT: sbyang ba. B: spyang ba, DHKLP: spyad. Ch1: 淨畢。Ch2, 3: 報。

<sup>(125)</sup> CNT: sbyang ba. B: spyar ba, DHKLP: spyad, Ph: omitted. Ch1: 畢了。Ch2, 3: 報。

は容易ではない。

(XXIX-2)

この法門に報いるのは、法の実践 (\*dharmapratipatti) <sup>(126)</sup> を除いて他にはない。まちがった実践によってではない。これに入った人々は、師匠 (\*upadhyāya) と先生 (\*ācārya) とに供養 (\*satkāra) したのである。彼らは恩に報いているのである。[P87b] 彼らはそれぞれ、<sup>(127)</sup>→ 負債なく、地域で托鉢によって得たもの (piṇḍapāta) を食べる。<sup>(127)</sup> 彼らはそれぞれ、如来のことばを実践しているのである。彼らはそれぞれ、河を渡る。彼らはそれぞれ、曠野を渡りきる。彼らはそれぞれ、傘蓋 (\*chatra) と幢 (\*dhvaja 勝利のはたぼこ) と幡 (\*patākā) を建てる。彼らはそれぞれ、勇敢であり戦いに勝利する。彼らはそれぞれ、師子のごとく、畏れも恐怖もない。<sup>(129)</sup>→ 彼らはそれぞれ、象 <sup>(128)</sup>のごとく、良き生まれ\* (ājāneya) である。<sup>(129)</sup> 彼らはそれぞれ、大象 <sup>(130)</sup>のごとく、心が平静である。彼らはそれぞれ、雄牛 (\*ṛṣabha)のごとく <sup>(131)</sup>、一切の外道に打ち負かされることがない。彼らはそれぞれ、医者であって、あらゆる人々を一切の病から解放する。<sup>(132)</sup>→ 彼らはそれぞれ、甚深の法を説くことに怖れがない。<sup>(132)</sup> 彼らはそれぞれ、布施を完全なものにして、一切の煩惱を捨てる。彼らはそれぞれ、戒を清浄にして、寂靜 (\*śānti) と正しい止 (\*śamaṭṭha) の彼岸に至る。彼らはそれぞれ、忍耐の力を得て、我への執着、我所への執着から離れる。彼らはそれぞれ、大いに精進し、無量劫をかけて、<sup>(133)</sup>→ [精進の] 無限の究極にまで至る <sup>(133)</sup>。彼らはそれぞれ、禪定を完全なものにして、念を持して心を専一にしている。彼らはそれぞれ、偉大な智慧があり、<sup>(134)</sup>→ 一切諸法の表示されることばに関する知を教示するのに巧みである <sup>(134)</sup>。彼らはそれぞれ、功德が大で、百福の相で見事に身を飾る (百福莊嚴) <sup>(135)</sup>。彼らはそれぞれ、大威徳 (\*mahātejas) があり、日月を凌駕することができる。彼らはそれぞれ、偉大な力を得ていて、[仏陀の] 十力

<sup>(126)</sup> Tib:chos kyi nan tan. Ch1:如所云法. Ch2:如説修行. Ch3:如説行. Cf. VKN ch.12 sec.12:「さらに、良家の子よ、法の供養とは、諸法について法として観察すること、法を実践すること、縁起に随順することである」 punar aparāṃ kulaputra dharmapūjā yā dhārmeṣu dharmanidhyaptiḥ, dharmapratipattiḥ, pratīyasamutpādānulomātā.

<sup>(127)</sup> Tib:bu lon med par yul 'khor gyi bsod snyoms za'o. Ch1:若入郡國縣邑, 有所服習分衛之具, 多所福度. Ch2, 3: 不空食人信施.

<sup>(128)</sup> Tib:bal glang. Cf. VKN ch.1 sec.2 ājāneyair mahānāgaiḥ (Tib:cang shes pa glang po chen po). なお, ājāneya(良き生まれ)は、馬の血統の良さに喩えられることが多い。RK:「すぐれた威力のある、よき生まれ (\*ājāneya) の馬は、馬に乗った人を守りはするが、自分〔自身〕をそうすることはない」(五島 [2013]38 頁)

<sup>(129)</sup> この1文は3漢訳に欠ける。

<sup>(130)</sup> Tib:glang po che. Cf. KP sec. 37:「よく制御された力ある象のように」 yathā nā(me)go balavān sudānto (Tib: dper na rab tu stobs ldan glang po che).

<sup>(131)</sup> Ch1:爲神仙所言至誠.

<sup>(132)</sup> Ch1 はこの1文を欠く。

<sup>(133)</sup> Tib:tshogs mu med pa'i mthar gtugs pa'o. Ch1:患厭終始. Ch2, 3:心無倦.

<sup>(134)</sup> Ch1:能分別一切章句. Ch2, 3:善解言説諸章句.

<sup>(135)</sup> Cf. Kṛp 174.10-12 「私が五体投地によって世尊の足に礼拝するときに、世尊は百の福德の特徴によって飾られた (百福莊嚴) 両足を私の頭の上に置いてください」 yadāhaṃ bhagavataḥ pañcamaṇḍalena pādau vande tadā me bhagavān chatapuṇyalakṣaṇālaṅkṛtāv ubhau caraṇau mūrdhni sthāpayatu.

の強さを持っている。彼らはそれぞれ、大雲のごとく、法〔の雷鳴〕を轟かす。彼らはそれぞれ、法の大雨を降らせて一切の煩惱を鎮める。彼らはそれぞれ、〔人々の〕抛り所 (\*ālaya)<sup>(136)</sup> であり、[P88a] 涅槃の村 (\*nirvāṇagrāma)<sup>(137)</sup> に入っている。彼らはそれぞれ、輪廻の恐怖に襲われている者にとっての守護者 (\*nātha) である。彼らはそれぞれ、灯火であり、愚かさの闇 (\*tamo'ndhakāra) を離れている。彼らはそれぞれ、魔に迫られている人々にとっての帰依所 (\*śaraṇa) である。彼らはそれぞれ、すべての人々の抛り所 (\*niśraya) である。彼らはそれぞれ、悟りの座で灌頂 (\*abhiṣeka) されている。彼らはそれぞれ、法眼を得ている。彼らは、法の真如を見ている。彼らは、一切諸法は空であると知っている。彼らは大悲に住している。彼らは大慈に〔向かって〕出発している (\*saṃprasthita)。彼らはすべての人々を捨てない。彼らは小乗に背を向けている。彼らは大乘に顔を向けている。彼らは顛倒〔した見解〕を捨てている。彼らは平等性に近づく。彼らは<sup>(138)</sup>→菩薩の決定位に入っている。←<sup>(138)</sup> 彼らは悟りの座に住している。彼らは魔の軍勢を打ち負かす。<sup>(139)</sup>→ 彼らは一切知に到達している (\*adhigata)。←<sup>(139)</sup> 彼らは法輪を転ずる。彼らは仏事 (\*buddhakārya) を行う。貴き友たちよ、この法を實踐するそれら正しい人 (\*satpuruṣa) たちの称讃を、私が、一劫もしくはは一劫以上語ったとしても、この法を實踐する正しい人たちの称讃の究極には至ることはない。<sup>(140)</sup>→ 如来の如き弁舌〔だけ〕が、成就できることである ←<sup>(140)</sup>」

## (XXX-1)

その時、まさにその集會に不退転 (\*Avaiivarta, Avaiivartika) という天子がやって来ていた。その時、仏に対して不退転天子はこう申し上げた、「世尊よ、法の實踐 (\*dharmapratipatti)、法の實踐と言われますが、世尊よ、どれだけのものが<sup>(141)</sup>、法の實踐というのでしょうか」

世尊が仰る。[P88b] 「天子よ、法の實踐とは一切の法を實踐しないことである。これが法の實踐である。なぜなら、<sup>(142)</sup>→ 諸法を實踐しない人は、←<sup>(142)</sup><sup>(143)</sup>→ [何ものも] 作らず、變化させないからである。←<sup>(143)</sup> 作らず、變化させないことが、法の實踐である。善に入らず、不善に入らないことが、法の實踐である。同様にして簡略化して言えば (\*saṃkṣepatas)、世間的なもの (\*laukika) にも、出世間的なものにも、有漏にも、無漏にも、<sup>(144)</sup>→ 非難されないこと (\*vadya) にも、非難されること (\*avadya) にも、←<sup>(144)</sup> 有為にも、無為にも、輪廻にも、そして涅槃にも、〔すべてこれらのことに〕入らないこと、これが法の實踐と言われる。一切

<sup>(136)</sup> Tib:gnas. Ch2:舎. Ch3:歸依.

<sup>(137)</sup> Tib:mya ngan las 'das pa'i grong. Ch1:第一無爲滅度. Ch2, 3:涅槃。「涅槃の村」は珍しく、仏典では「涅槃の町 (nirvāṇanagara, Tib: mya ngan las 'das pa'i grong khyer) が一般的である。Cf. *Kṛp* 213.7-9:「悟りを悟った私は、〔かれら〕すべてを、輪廻の泥から引き上げるでしょう。怖れ無き都、涅槃の町に入らせるでしょう」 bodhiprāptaś cāhaṃ sarvān saṃsārapaṅkāḍ uddhareyaṃ, abhayapure ca nirvāṇanagare prāveśayeyaṃ.

<sup>(138)</sup> Tib:byang chub sems dpa'i nges pa la zhugs pa'o. Ch1:越度名字而舉德號. Ch2, 3:入於法位.

<sup>(139)</sup> Ch1, Ch2 はこの1文を欠く.

<sup>(140)</sup> Ch1:唯有如來辯才具足, 能歌歎此奉持法者. Ch2:如來之辯亦不可盡. Ch3:如來之辯亦不可盡. 所有功德亦不可盡.

<sup>(141)</sup> Tib:ji tsaṃ gyis. Cf. *KP* sec.121:kiyan nu tāvat (Tib:ji tsaṃ gyis na).

<sup>(142)</sup> Ch3:若人修行一切諸法.

<sup>(143)</sup> Ch1:則不造法亦無不造. Ch2:則不分別是正是邪. Ch3:彼法不作亦非不作.

<sup>(144)</sup> Ch2, Ch3 はこの部分を欠く.

の法を行じることがなければ、これが法の実践である。法の観念 (\**dharmasaṃjñā*)<sup>(145)</sup>には法の実践はない。『この法を実践すべきだ』と戯論<sup>(146)</sup>し、『実践すべきでない』と戯論する時には、〔法の実践には〕入っていないのである。あらゆる法に随順するというこの実践こそが、法の実践なのである。戯論がなく、対応するもの (\**pratipakṣa* 対治)<sup>(147)</sup>がないことが、法の実践である」

その時、世尊に対して、不退転天子が次のように申し上げた。「世尊よ、この正しい実践に入った人、あるいは〔これから〕入るような人に、間違った実践はありません。なぜなら、世尊よ、これはきわめて正しい実践だからです。間違った道に入った人たちには、およそ実践というものはありません。正しい道 (\**samyagmārga*) に入った人にも、法の実践はありません。正しく〔法の実践に〕入った人たちには、いかなる不平等な法もありません。なぜなら、世尊よ、一切諸法は平等であり差別というものはないからです」

## (XXX-2)

その時、ブラフマー神であるヴィシェーシャチンティン (V) は、かの天子 (\**Devaputra*, D) にこう言った。「天子よ、あなたはこの実践 (\**pratipatti*) に入っているのですか」

〔D が〕言う。〔P89a〕「ブラフマー神よ、もし世尊が実践を二つのものとして説かれたのであれば、私もまたその実践を実践します。〔しかし〕実践には二というものはないので。そこには、実践を行う人も、実践が行われる場所もありません。およそ実践をするということがないのです。また、ブラフマー神よ、私は目標の設定 (\**adhikāra*) をすることがなく、〔真実には存在していないものを存在するものとして〕提示 (\**samāropa* 増益) することもないから、この実践に入るのです。法則性 (\**dharmatā*) のままに実践はあるのです。それは、真如にそのように入っている時に、〈入っている〉と言われます」

ブラフマー神が言う。「<sup>(148)</sup>天子よ、以前、私は、この仏国土において、あなたを見たことがありません」<sup>(148)</sup>」

〔D が〕言う。「ブラフマー神よ、この仏国土もまた、以前、私を見たことがありません」

〔V が〕言う。「この仏国土は、〈見るだろう〉とかく見ないだろう〉とか考えたり、分別したりしません」

〔D が〕言う。「ブラフマー神よ、私もまた、〈私は以前見た〉とかく以前見たことがない〉とか考えたり、分別したりしません」

〔V が〕言う。「天子よ、以前見なかったものを見るのは誰ですか」

<sup>(145)</sup> Cf. SR 198.12-13:

救済者たる菩薩は一切諸法を滅している。  
〔彼は〕法の観念を滅しているので、仏陀の法を概念的に捉えることはない。  
*vibhāvitaḥ sarvadharmā bodhisattvena tāyinā /*  
*dharmasaṃjñā vibhāvitvā buddhadharmān na manyate // ch.32 v.44 //*

<sup>(146)</sup> 戯論の語義については注 98 参照。

<sup>(147)</sup> *pratipakṣa* は、病気に対応した治療薬、喉の渇きに対応した水、煩惱の生起に対応した修行道 (個々の煩惱を押さえる心作用) の意。Cf. *VKN* ch3 sec.6: 「〔法は虚空のように〕類例がない、対応物がないから」 *asadṛṣo niṣpratipakṣatvāt*。

<sup>(148)</sup> Ch1 と Ch2 は「あなたはこの仏国土をかつて見たことがありますか」とする。

〔D が〕言う。「一切の愚かな凡夫は、聖なる決定<sup>(149)</sup>に入ることを以前見たことはありません。ブラフマー神よ、正しく決定に入ったものは、以前見なかったものを見るのです。この〔聖なる〕決定は、眼識によって知られるものではありません。耳・鼻・舌・身・意の識によって知られるものでもありません。真如のあるがままに見られるべきなのです。眼のあるがままに、耳のあるがままに、鼻のあるがままに、舌のあるがままに、身のあるがままに、意のあるがままに見られるべきなのです。そのように見る人たちは、正しく見ているのです」

## (XXXI-1)

その時、神々の主であるシャクラが世尊にこう申し上げた。「世尊よ、宝の島に行った隊商のリーダー(\*sārthavāha)は、その眼の見える限り(\*darśanapathe), [すべて]摩尼宝珠(\*maṇiratna)ばかりを満喫します。そのように、世尊よ、[P89b] 不可思議の法の宝(\*acintyadharmaratna)をもつ正しい人(\*satpuruṣa)たちは、あれこれ〔様々な〕楽説(\*pratibhāna ひらめきに基づく説法)を行います。彼らはすべて法という宝をこそ楽説しているのです。彼〔ら〕は、真実の究極(\*bhūtaḥkoṭi 実際)を明示しようとして(\*saṃprakāśayitum) 楽説するのです。<sup>(151)</sup>→このように、彼らには、我に対する貪着(\*ātmābhiniveśa)<sup>(150)</sup>がなく、法に対する貪着がなく、人(\*sattva)に対する貪着がないからです。<sup>(151)</sup>それゆえ、邪〔見〕なく顛倒なきものとして楽説する<sup>(152)</sup>ように、そのように楽説します。前際(\*pūrvānta 過去)を浄化し<sup>(153)</sup>、後際(\*aparānta 未来)を対象化せず(見ず)、現在においても〔知覚の対象となる〕そのようなものはない、とそのように楽説します。信解していない者たちは信解させ、信解している者たちは解脱する、とそのように楽説します。慢心をもつ者たちは制圧し、慢心のない者たちには<sup>(154)</sup>→すべてを理解できるように問いに答える<sup>(154)</sup>、とそのように楽説します。悪魔につけ込まれないように楽説します。そのように聞いた者たちも魔のしわざから超出する〔ように楽説します〕。善根を生じていない者は〔それを〕生じさせ、善根を生じている者は〔それを〕損耗させず、煩惱が生じている者は〔それを〕断滅し、生じていない者は〔これからも〕生じさせない、とそのように楽説します。鎧を着ていない菩薩たちは鎧を求め、鎧を着ている者は退転しない、とそのように楽説します。正法を断滅させない、正法を護持する、とそのように楽説します。すべての仏法を完全に成就するように楽説します。世尊よ、そのような楽説によって、一切の外道を打破することができます。なぜなら、世尊よ、<sup>(155)</sup>→ジャッカル(\*śṛgāla)は師子の声には耐えられません。<sup>(155)</sup>まして〔自ら〕吠えることなど〔できるはずも〕ありません。世尊よ、ちょうどそのように、[P90a] 一切の外道は、この上ない師子吼(\*simhanāda)には耐えられないのです」

## (XXXI-2)

(149) Tib: 'phags pa'i nges pa. Ch1: 諸賢聖士. Ch2, 3: 聖法位.

(150) Tib: mngon par chags pa. Cf. *Dbh* 31.16: abhiniveśa (Tib: mngon par chags pa).

(151) Ch1: 於諸法無所倚著不著彼我. Ch2: 於諸法中無所貪著不著彼我. Ch3: 不著我見不著衆生見.

(152) BKNPhT: spobs. CDHLP: spros.

(153) KLPhT: sbyong ba. BCDHNP: spyod pa. Ch1: 淨 於往古. Ch2: 過去際 空. Ch3: 清淨 本際.

(154) Tib: kun 'tshal(CNP: 'chal) ba [B:ltar, P:la] lan ldon(B:lon, P:lton) pa. Ch1: 開化自大使無異決. Ch2: 自說所作已. Ch3: 令如實知.

(155) Cf. *Sū* 25.10: na hi ānanda śṛgālaḥ simhanādaṃ paribhūṅkte.

そのとき不退転天子は神々の主であるシャクラにこう言った。「カウシカよ、師子吼、師子吼といいますが、どういうことで師子吼というのですか」

〔シャクラが〕言う。「天子よ、いかなる法にも貪着することなく語ることが師子吼です。見解に貪着して語るとは<sup>(156)</sup>→ 師子吼ではなくて、ジャッカル（ジャッカル）の鳴き声〔に過ぎない〕のです←<sup>(156)</sup>。〔間違った〕見解を起こして説くことは師子吼ではありません」

<sup>(157)</sup>→ 神々の主であるシャクラは〔また〕こう言う。←<sup>(157)</sup>「天子よ、あなたは、師子吼がどういふものか楽説して下さい」

〔天子が〕言う。「カウシカよ、如来に貪着しないで説くのであれば、それ以外の劣った法〔に執着して説かないことは〕言うまでもないことです。それゆえ、師子吼というのです。正しい実践は師子吼なのです。それゆえ、師子吼といいますが、これは〔きっぱりと〕決定的に(\*ekāṃśam) 説くことです。それゆえ、師子吼といいますが、これは怖れることなく説くことです。それゆえ、師子吼といいますが、カウシカよ、一切諸法が生ぜず、滅せず、<sup>(158)</sup>→ 得ることのないこと←<sup>(158)</sup>を〔ひたすら〕修習するために法を説くことが師子吼なのです。煩惱を淨め、束縛から離れるために法を説くことは師子吼ではありません。カウシカよ、師子吼というものは、たとえば、『一切法は、無人である(\*niṣpudgala)<sup>(159)</sup>、無我である』と決定的に説くことなのです。カウシカよ、師子吼、師子吼といわれるものは、たとえば、『一切法は空である、無相である、無願である』と決定的に説くこと、それが師子吼なのです。『正法を守るために』と言葉にして言うことが師子吼です。たとえば、『一切の衆生を解脱させるために仏になろう』というふうに、悟りに向かって心を起こして〔それを〕言葉にして言うことが師子吼なのです。『自らに〕ふさわしい品物に満足(少欲知足)しています』と言うことが[P90b] 師子吼です。カウシカよ、師子吼というものは、たとえば、荒野(\*araṇya)に住し、<sup>(160)</sup>→〔規定に従って〕正しく受け取り、施与(\*tyāga)を第一にする←<sup>(160)</sup>ことが師子吼です。戒を正しく持して、捨てないことが師子吼です。怨親(敵と味方)に対して心が平等であることが師子吼です。懸命な努力(\*abhiyoga)を捨てないことが師子吼です。煩惱を断じることが師子吼です。智慧によって正しく理解すること<sup>(161)</sup>が師子吼です」

### (XXXII-1)

この師子吼〔に関する〕教示が語られた時、三千大千世界は六種に震動した。百・千の多くの楽器(\*tūrya)が叩かれずして〔自然に〕音を出し、諸世界は大いなる光明で輝いた。百・千の天子が讃嘆の声を上げてこう言った。「おお(\*aho)、いまここで、天子による師子吼をいま私たちは聞きましたが、〔それによって〕ジャンブドヴィーパにおける第二の転法輪が生じたのです」

<sup>(156)</sup> Cf. 『長阿含経』：「〔ある〕ジャッカルが自らをライオンと称し百獣の王と思ひ込んでライオンの雄叫び〔の声〕を出そうとしたが、出たのはやはりジャッカルの声だった」(Taisho vol.1 69a9-10 原文は偈頌)

<sup>(157)</sup> 蔵訳のみで、3 漢訳には見られない。

<sup>(158)</sup> Ch1:無有自然。Ch2:不出。Ch3:不爲法生不爲法滅。

<sup>(159)</sup> Tib:gang zag med. 〔人格や輪廻〕の主体がないこと。Ch1:不計有人。Ch2, 3:無衆生。漢訳は niḥsattva を予想させる。

<sup>(160)</sup> Ch1:布施之本而造元首。Ch2:行施唱導。Ch3:自行施化他令施。

<sup>(161)</sup> Ch1:等觀智慧。Ch2, 3:能以智慧善知所行。

(162)→ さて、その時、世尊は、笑われたが、決まり (\*dharmatā) として以下のようになった。〔つまり〕仏陀世尊が笑われたとき、様々の種類、つまり、青、黄、赤、白、あかね色、水晶、銀の色をした光が口から生じ、無量の世界を照らして梵天の世界まで上昇し、戻って来て世尊の〔周りを〕3回まわってから、世尊の頭頂 (\*mūrdha) に消えたのである。←(162)

---

(162) 仏陀が過去や未来についての説明を与えるときの定型的表現。戻って来た光線が頭頂（正確には肉髻 *uṣṇīṣa*）に入るのは、この後に未来時における無上正等覚の授記が語られることを示している。詳細は五島 [2001] 訳註 [20] (32-33 頁) 参照。

<一次文献・略号> (校訂テキストまたは西藏大蔵経, 大正大蔵経)

- AVP* *Avalokītavratā's Prajñāpradīpaṭīkā*, Tib: Shes rab sgron ma rgya cher 'grel pa, Otani No.5259, Tohoku No.3859.
- Bhk* *Bhāvanākrama : Minor Buddhist Texts Part III Third Bhāvanākrama*, Giuseppe Tucci(ed.). Serie Orientale Roma XLIII, Roma, 1971.
- BP* *Brahmaviśeṣacintipariṣcchā*.
- Dbh* *Daśabhūmikāsūtra*, Edited by P. L. Vaidya, BST No.7, Darbhanga, 1967.
- GUP* *Gṛhapaty-ugra-pariṣcchā*. 'Phags pa khyim bdag drag shul can gyi zhus pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo, Otani No.760(19), Tohoku No63. IHa sa ed. No.63.
- JĀA* *Jñānālokālamkāra, Transliterated Sanskrit Text Collated with Tibetan and Chinese Translations*, edited by Study Group on Buddhist Sanskrit Literature, The Institute for Comprehensive Studies of Buddhism, Taisho University, 2004.
- KP* *Kāśyapaparivarta*, A. von Staël-Holstein (ed.), Shanghai, 1934; *The Kāśyapaparivarta Romanized Text and Facsimiles*, M.I. Vorobyova-Desyatovskaya (ed.), Tokyo, 2002.
- Krp* *Karuṇāpūṇḍarīka*, edited with Introduction and Notes by Isshi Yamada, Vol.II, London, 1968.
- LV* *Lalitavistara*, edited by P. L. Vaidya, BST No.1, Darbhanga, 1958.
- Pra* *Prajñāpradīpa*, Tib: dBu ma'i rtsa ba' i 'grel pa shes rab sgron ma, Otani No.5253, Tohoku No.3853, Ch: 『般若燈論釋』 Taisho No.1566.
- Pvsp* *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā*, edited by Nalinaksha Dutt, Calcutta Oriental Series No.28, London, 1934.
- RK* *Ratnakaraṇḍa*, Tib: 'Phags pa dkon mchog za ma tog ces bya ba theg pa chen po'i mdo. Otani No.785, Tohoku No.117.
- SN* *Samyutta-Nikāya*, 5 vols, PTS., 1884-1898.
- Sn* *Suttanipāta*, PTS., 1913.
- SR* *Samādhirājasūtra*, Edited by P.L.Vaidya, BST No.2, Darbhanga, 1961.
- SS* *Nāgārjuna's Sūtrasamuccaya : A Critical Edition of the mDo kun las btus pa*, Edited by Bhikkhu Pāsādika, 1989, Copenhagen.
- Sśp* *Saptaśatikā Prajñāpāramitā*, edited by P. L. Vaidya, BST No.17, Darbhanga, 1961.
- Su* *Suvikrāntavikrāmipariṣcchā Prajñāpāramitāsūtra*, by Hikata Ryusho, Fukuoka, 1958 ; reprint, 1983 (臨川書店).
- Sukh* *Sukhāvativyūha*, Atuuji Ashikaga (ed.), Kyoto, 1965.

- VKN *Vimalakīrtinirdeśa, Transliterated Sanskrit Text Collated with Tibetan and Chinese Translations*, edited by Study Group on Buddhist Sanskrit Literature, The Institute for Comprehensive Studies of Buddhism, Taisho University, 2004.

<二次文献・略号> (辞書・索引類)

- AD *The Practical Sanskrit-English Dictionary*, by Prin. Vaman Shivaram Apte, Revised & Enlarged Edition, Kyoto, 1978.
- Mvy *Mahāvvyūpatti*: 『梵藏漢和四譯對校・翻譯名義大集』鈴木学術財団, 1916.
- TED *A Tibetan-English Dictionary*, ed. by H.A.Jäschke, London, 1881. Compact Edition, Kyoto, 1982 (臨川書店).

<三次文献> (論文・著書)

- 一郷正道 [2011]: 『瑜伽行中観派の修道論の解明—『修習次第』の研究—』2008年度2010年度科学研究費補助金 基盤研究 (C) 成果報告書 (課題番号 20520049).
- 五島清隆 [2001]: 「チベット訳『有徳女所問経』(I)・和訳」『佛教大学仏教学会紀要』# 9, (1)-(43)頁.
- [2002]: 「チベット訳『有徳女所問経』(II)・校訂テキスト」『佛教大学仏教学会紀要』# 10, (1)-(39)頁.
- [2009]: 「チベット訳『梵天所問経』—和訳と訳注(1)」『インド学チベット学研究』# 13, 141-184頁.
- [2010]: 「チベット訳『梵天所問経』—和訳と訳注(2)」『インド学チベット学研究』# 14, 89-125頁.
- [2011]: 「チベット訳『梵天所問経』—和訳と訳注(3)」『インド学チベット学研究』# 15, 196-230頁.
- [2012]: 「チベット訳『梵天所問経』—和訳と訳注(4)」『インド学チベット学研究』# 16, 124-155頁.
- [2013]: 「チベット訳『宝篋経』—和訳と訳注(1)」『佛教大学仏教学部論集』# 97, 29-56頁.
- 高崎直道 [1974]: 『如来蔵思想の形成』春秋社.
- 平川 彰 [1968]: 『初期大乘仏教の研究』春秋社.

## An Annotated Japanese Translation of the Tibetan Version of the *Brahmaparipṛcchā* (5)

### Summary

At the end of the preceding volume (*bam po*), when Mañjuśrī and Samatāvihārin argue over two things, viz. exposition of teachings (*dhārmī kathā*) and holy silence (*ārya-tūṣṇībhāva*), the Buddha reveals that an incredibly long time ago the Tathāgata Samantaprabha gave a sermon on these two things to two *bodhisattvas*. At the beginning of this fifth volume the Buddha declares that the two *bodhisattvas* Akṣayamati and Viśeṣamati who then listened to the sermon are now Mañjuśrī and Samatāvihārin respectively. As in the previous volumes, the dialogues that follow clarify various terms and doctrines of Mahāyāna Buddhism.

Especially noteworthy among these is “concentration (*samādhi*) on the perfectly pure splendor (*pariśuddha-ābhāsa*).” According to the theory of this concentration, all things in the world are perfectly pure in their original nature (*prakṛtipariśuddha*) throughout the three periods of past, present, and future, and they are transparently luminous in their nature (*prakṛtiprabhāsvara*). Since all things are perfectly pure in their nature, the mind is also perfectly pure. Therefore the mind of common people is liberated in the sense of “liberated in their original nature.” Here we see three elements. The first is a thought already seen in the canonical text (*Āgama*) that the mind is originally pure in its nature and is contaminated by adventitious afflictions. The second is a thought found in the Mahāyāna texts (especially *Prajñāpāramitāsūtras*), based on the theory of emptiness, that all things are perfectly pure. And the third may be seen as an element connected to the theory of the *tathāgatagarbha* (embryo of a Buddha) that would develop later. That this teaching of the original purity of the mind is taught in the Sūtra only in the present volume has great significance for the intellectual-historical background of the Sūtra.

The Sūtra declares that all things, whether mundane or supra-mundane, being in the relationship of non-duality (*advaya*), are pure in their original nature. It not only reveals this truth, but also examines the relation between the truth and words that are supposed to convey that truth. For example, the Sūtra defines *adhivacana* (which simply means “a word”), understood in the mundane sense, as a means of presenting (*samāropa*) as existent what does not really exist by setting a certain subject as a target (*adhikāra*). In the case of a Buddha, as he preaches without any presentation or setting a target, his words are called superior words (*adhika-vacana*). The great interest shown in the preceding volume of the Sūtra in these two things (exposition of teachings and holy silence) may be thought of as stemming from the same critical consciousness.

Two thirds of the way through this volume Mañjuśrī and Samatāvihārin disappear, and the final portion takes either of two forms, that of a dialogue among Brahmā Viśeṣacintin, Devaputra Avaivartika (who newly appears in this volume) and Śakra, or that of questions they ask of the Buddha. Avaivartika will be predicted by the Buddha to attain Buddhahood at the beginning of

the next volume.

<キーワード> 浄明三昧, 不退転天子, prakṛtiprabhāsvara, prabhāvita, dharmapratipatti